

れ切つたる勇ましき突進の勢のぬけかゝつた時に、面ても向け得られぬ程な烈しき射撃を受けたのであるから。其損害の非常に多數であつたのはいふ迄もなく、非常に夜襲隊の志氣の上にも沮喪を來して、三臺子の東北角附近へ迫りは迫つたが、圍壁堅固にして容易に侵入することを得ず、空しく壁を隔て、彼我相對峙するといふ頗ぶる不利の状況に陥つたのである。歩兵操典第二部第八十五に曰く

『夜襲ハ殆ンド歩兵ノ專任スル所ニシテ其奏功ノ要訣ハ不意ニ敵ニ肉薄シ銃劍ヲ揮ヒ一舉ニ決戦ヲ求ムルニ在リ是夜間ハ火力ヲ發揚シ得ザルノミナラズ之ガ爲我ガ企圖ヲ曝露シ又行進ヲ遲滯セシムルノ不利アレバナリ』
奏功の要訣は確かに不意を撃つにあるのである、然るに三百米突も前から大喊聲を揚げて仕舞ては、此の奏功の要訣は殆んど破壊し盡されて仕舞つたと同様である。これに付ては歩兵操典の第一部に於ても『要スレバ裝填ヲ禁ジ（中略）火戦ヲ行フコトナク直ニ突撃ニ移ルヲ可トス』といひ、更に其次の第百八

十五の第三項に於て

『行進中敵ノ有効射撃ヲ受クルカ又ハ火光ニ依リ探照セラレタルトキハ其効力及注意ヲ減殺スル爲一時靜止スルヲ可トスルコトアリ云々』
と戒告したのは、要するに敵の不意に乗ずるといふのが奏功第一の秘訣であるから、それが爲めに此様に度々くり返して其主意を述べてあるのである。然るに此の吉野少佐の大隊は全く此の教訓に違背して、遠く敵前から公々然と大吶喊をなしつつ進んだのであるからたまらぬ。随分と大なる兵力を有して居たにかゝはらず、敵の一圍壁をも占領するを得ずして、敵の圍壁の下に徒らに立ちすくみになつて仕舞つたといふ爲體らく、これ全く夜戦の要訣を無視したる大過失からして、此様な不體裁不利益を演じ出したのであつて。これ實に上下一同夜戦に慣熟して居らなんだのに基因するとはいへ、確かに吉野少佐が夜襲決行前に部下將卒に其注意を豫め與へて置かなんだのが原因であつて、此過失の責任は此の大隊長の不注意にあると評者は思ふ。

吉野少佐は第一線の三中隊の戦況發展せざるを見て、第二線の第五中隊を第一線の左翼に加へて其勢を添へ、それと同時に戸枝中佐に増援派遣を請求したが。此時まだ吉野少佐は其手中に第七中隊を握つて居て、自からは此第七中隊と共に圍壁から二百米突程距てたる墓地附近に居たのであつた。此の第五中隊の増加は最も適當であつたけれども、それと同時に増援を聯隊長に請ふたのは稍至當でない。何故なればまだ吉野少佐は第七中隊を持つて居るではないか、今後更に増加の必要を認めれば其一小隊を残して他の二小隊を第一線にやれば、それで一時の急を充分に凌ぎ得られるのである。それに直ちに増援を聯隊長に請ふといふのは過早である。況んや聯隊長の手許には第九中隊があるばかりであることは、既に出發の時から明に承知して居たのであつて、戸枝中佐の現状は殆んど本部護衛兵を持つて居るばかりといふてもよい程の有様なのである。それにまだ使用せぬ一中隊を握つて居りながら、更に其少ない聯隊豫備隊から増援を求めたのは吉野少佐の處置頗ぶる其當を

得て居らぬ。戸枝中佐が第十中隊の其手には入るまで吉野少佐に増援を送らなんだのは當然である、否送らんとしても送るべき兵力がないのであるから詮方ないのであつて、此場合の吉野少佐の請援は確かに大早計に失したものと評者は認めるのである。

第二大隊は過早に喊聲を揚げて敵の注意を喚起したる結果、非常に苦戰惡闘したに係はらず九日午前三時頃まで、伊達の三の切ではないが、此牆一重が鐵のといふ袖萩の科白を其儘、土壁の内外から相對峙して如何ともせん方なく時を費やして居たのであつたが。過早に失した請援を一時拒絶した戸枝中佐は、午前一時三十分過に第十中隊が包道屯の守備を香月後備聯隊と交代して歸還したので、時を移さず第九中隊を吉野少佐の救援に向はせて、此中隊が八日午前三時頃吉野少佐の下に到着した。そこで直ちに此の第九中隊を第一線の中央に増加したが、此中隊は敵に覺られることなく極めて靜肅に第一線に加はり。密かに其前面の敵の據れる三臺子東端圍壁の入口を偵察して

見ると、自分が今加はつた直き前面の此圍壁の西北端に一通路を見つげ出したので。これぞ實に天の與へと全然敵の不意に乗じて其圍壁内に突入し、これに勢を得たる第五、第八兩中隊も其東北角から圍壁を越へて亂入し大激戦を交へた後、始めて此の圍壁内の敵を驅逐して其一廓の圍壁を占領したが。此の第九中隊の見付け出した一通路は前から開いて居たのであるが、最初此壁下に立すくみになつて仕舞つた第一線は、敵の五十米突内外の猛射に驚かさず、仕舞つて。圍壁の下に飛び込んで仰天の餘り眼前の通路をも見付け出だし得ず、をめぐるとして約二時間此の壁下にまご／＼して居て、後から來た雁が終に先になつて仕舞ふ様な不始末に及んだのも。畢竟敵の不意に乗ずべき夜襲隊が、却て敵から不意の急射撃を受けて度ぎもを抜かれて仕舞つたが爲めに、終に此様な不覺を取るに及んだのであるが。第九中隊が加はつた爲めに始めて堅固なる一圍壁を奪ひ得て、こゝに吉野大隊は此村端に一大據點を構成し得たのであつた。

話あとに戻つて勝田少佐の第一大隊は、極めて静肅を保つて潜行しつゝ、敵前約五十米突に達したと思ふ頃、敵の下士哨の如きものから數發の射撃を受けたが。此時早く彼時遅し第二大隊が例の過早の大喊聲を揚げるのを聞いたので。此の敵の射撃と友軍の喊聲とが忽ち此の大隊の精神を突發的に昂奮させて仕舞つて、第一線たる第三、第一兩中隊は喊聲を揚げて突撃に移つたが。其距離が頗ぶる敵に近いので敵は吉野大隊に對する様に充分に準備することが出來ぬ中に、我第三中隊は三臺子北端中央の一小圍壁内に突入して忽ち之を占領し、第一中隊も次いで其東方に隣れる一圍壁を占領した。此兩中隊は吉野大隊に比すれば若干敵の不意に乗じ得たので、難なく圍壁を何れも奪い得たけれども、敵は今夜々襲のあるべきを豫め覺悟して居たのであるから、容易に退却する様なことはせずして頑強至極に圍壁を争そひ。第一中隊は圍壁内で敵と激しき白兵戦の眞つ最中であるのに、一方第三中隊の方では其占領したる圍壁の西南から敵の大逆襲を受けるといふ危急至極なる始末。けれ

ども全隊必死の勇を奮ふて此敵を撃退し、三臺子北端中央部の占領を確實にしたのは天晴であつたが。此の兩中隊が敵の直前まで潜行せずして敵の射撃と友軍の喊聲に誘はれたのは、彼の歩兵操典第一部第百八十五の第二項に『夜間ノ運動ニ在リテハ他方面ノ銃聲又ハ喊聲ニ牽カレテ其行進方向ヲ換フルコトナキヲ要ス云々』

と戒めてある如く方向は間違へなただけけれども、其銃聲と喊聲に誘はれて稍、過早に突撃に移つたのは大に注意すべきことであつて。効果は至當に收め得たけれども、爲めに全然敵の不意に乗ずるといふ譯にはゆかなんだのであつた。

乍去此の第三、第一兩中隊は確かに幾分敵の不意を衝き得たのであるから、吉野大隊が圍壁の下に達するか達せぬ時、即ち午前一時三十分前後に於て三臺子北端中央部の圍壁を、確實に占領してこゝに立派に據點を構成したのであるが。此方面でも此の第一線の立派な成效に反して第二線の第四、第二の兩

中隊は、同村西北端の一廓に迫つて見たけれども、其圍壁が高くして容易にこれを超越し難く、該壁下に躊躇して居る所を其右方の墓地と圍壁の上からとの兩方よりの十字火を被ひり。大に狼狽しかけたる有様を見て取つたる頑強無双なる敵は、忽ち第二中隊に向つて猝猛なる大逆襲を決行したので、いひ甲斐なくも此の中隊は散々に潰走した。單に自分の中隊のみではない其後方から進んで來た第四中隊をも、忽ち此の渦中にまきこんで仕舞つて共に潰走せしめたのは實に残念千萬であつたが。闇中であつた爲め敵も長追ひをせず我も亦餘りに混亂に陥らなんだ爲め、幸に早く此の兩中隊を收結し得たのは勝田少佐の必死の盡力の致す所であつて、實に夜襲隊の爲めには天佑ともいふべきものであつた。

此潰走の大騒動最中に既に圍壁を占めた第一線にも、同様に猛烈なる逆襲が來たのであつたが、第一、第三兩中隊は頑として寸歩も動搖せず毅然としてこれを喰ひ止め。勝田少佐は必死部下を督勵すると共に彈藥と機關銃の至急

送致を戸枝中佐に請求し、甚だしく潰亂するに至らずして第一線右翼後の墓地に收結し得たる、第四中隊を直ちに此の第一線に増加して、潰走の後集合しつゝある第二中隊を更に同墓地に招致して豫備隊としたのが、彼れこれ八日午前二時三十分頃であつた。

第一、第三中隊が非常に苦戦して敵の逆襲を防いで居る所へ、新手の第四中隊が到着して志氣大に振ふと同時に、缺乏して居たる彈藥が戸枝中佐から届けられたので、更に一層の勇氣を増して數度繰り返したる敵の頑強なる逆襲を美事に撃退して、漸次に其地歩を同村中央の圍壁内に於て占め得るに至つた。斯くして吉野大隊も勝田大隊も三臺子の北端に何れも確實なる據點を得て、爾後くり返し決行せられたる熱心にして且つ執拗なる敵の突進を撃退して、近く土壁を隔て、敵と相對戦して居る中に、午前五時に至ると勝田少佐の請求に應じて旅團長が進めたる機關銃四挺が戸枝中佐の下に達したので、同中佐は直ちにこれを第一線に増加せしめたので、こゝに第一線は愈々其

勇氣を増し其力を加ふるに至つた。

午前五時となれば最早此夜の夜戦も一先づ終結に近づいて、一舉愉快に三臺子を占領し得なんだのは残念であつたけれども、兩大隊何れも其北端の圍壁を確實に占領し得たのは先づ以て成効と稱すべきであつたが、今や夜も既に明けなんとする午前五時を過ぎたので、村落外に控置して不意の事變に應ぜんとした、兩大隊の第二及び第七兩中隊の豫備隊は、何れも其大隊長勝田、吉野兩少佐と共に村落内に前進して、敵の天明後に於て當然決行すべき烈しき射撃を避けるの舉に出たが、これ實に最も適當なる處置であつて夜あけて後迄、もしも此の豫備隊が何れも夜間の位置なる三臺子北方の兩墓地に居たならば、敵の彈巢となつて非常な悲惨な目にあつたのは請合である。それを見越して速に村内に入りこゝに第十五聯隊の第十、第十二中隊を除く十箇中隊がまとまつて第一線の志氣を鼓舞すると共に、豫め其損害を避ける様にしたのは實に申分がない處置と評者は感心するのである。斯くて八日夜の

勢猛酷烈なりし夜襲は一段落を告げて愈、翌九日の戦闘となつたのである。

乃木軍司令官は此の九日の拂曉頃までに、第四軍が奉天東方を経て魚鱗堡以東の地區に達し、又第二軍が同時前紅旗臺附近に第八師團を移して、奉天新民府街道以南の地區を占領するの部署を取つたことを、八日夜半の大山總司令官の通報に依つて承知したので。砲兵第二旅團を四臺子附近に進めて第三縱隊の攻撃を援助せしめ、第三縱隊には依然柳條胡附近に進出するの前任務遂行を督促し、且つ可成其左翼を延して勉めて速に鐵道及び奉天—鐵嶺街道を遮斷すべく、九日午前二時から同三時半の間に命令を下したのであつた。

第一師團長は此の命令を受領せぬ前に於て既に攻撃繼續に關する命令を下して、右翼隊たる馬場少將部隊には三臺子の敵を撃攘して、此の九日に於て二臺子に向つて前進せしめて、左翼隊たる中村少將の部隊には依然觀音屯を攻撃せしめて、これを攻略したる上は更に魚鱗堡に向ひ速に前進すべきを命じ。砲兵第一聯隊をして拂曉より主力を以て先づ三臺子を射撃して、右翼隊

の攻撃を援助し同村を陥落せしめ得たる後は、更に觀音屯を射撃して左翼隊の攻撃を援助せしむべく、九日午前三時に於てそれ／＼命令したのであつた。然るに同日午前五時に至つて前掲の軍命令を受領し、新に後備歩兵第十四旅團(一大隊欠)を師團に増加せられたので。其計畫の一部を改め左翼隊の觀音屯攻撃の時期を速にすると共に、後備歩兵第十五聯隊第一大隊(第四中隊欠)の包道屯にありしを其儘にて、右翼隊長たる馬場少將の手中に移した。

そこで馬場少將は如何なる部署をしたかといふと、小山田大尉の指揮する増加されたる後歩第十五聯隊第一大隊(第四中隊欠)を以て依然包道屯を守備して右翼を警戒せしめ、徹夜惡戰苦闘の限を盡して三臺子の北部を略取し、近く敵と相接著して不眠不食で戦闘を繼續せる、歩兵第十五聯隊第十二中隊欠と機關銃四挺に對して。歩兵第一聯隊の第二中隊を増加して、自餘の後備隊を握つて金家窪子に位置したのであつた。こゝで頗ぶる評者の不思議に感ずることは、何故に馬場少將は高崎聯隊の第十二中隊が現在其手中にあるに係

はず、それをさし措いて第一聯隊の第二中隊を同聯隊に増加したのであるか。昨夜以來今少し前線に兵力を加へたならばと思ふ折は随分多いので、此第十二中隊などは當り前ならばも早やとつくの昔に原聯隊に復歸せしめてよいのであるのに。それを控置して兵力の出し吝しみをした而已か、愈第一線に兵力を加へるといふ段になると、全く建制を異にしたる第一聯隊第二中隊を出したのは、評者には如何にしても解釋の出來ぬ疑問である。何かこれには理由があつたらふが何れにしても、此増援には同聯隊の第十二中隊をやるのが至當であるのはいふ迄もない。

戸枝中佐は高崎聯隊の第一大隊に機關銃二挺を附して、これに三臺子の北端西部の兩圍壁に據らしめ、第二大隊と第九第十一中隊と機關銃二挺を以て同村北端東部の兩圍壁を占領せしめて居たが、今増加されたる第一聯隊の第二中隊をも到着と同時に、忽ちに前進せしめて吉野第二大隊長の令下に屬して。獨り聯隊本部は第三大隊長栗野少佐と共に豫備隊たる第十中隊を護衛と

して、拂曉前に同村北端を距る、約三百米突の地まで前進したのであるが。夜が明けると共に敵は少しく後退して其大部分は、三臺子西南隅の圍壁及び屋内に集まつて、近きは僅か五十米突遠きは二百五十米突を隔て、我第一線と相對峙し、頑強無双に防守する而已か時々逆襲の勢を示すので。思ひ切りのよい兵力を吝まぬ戸枝中佐は其豫備隊の第十中隊の僅かに二分隊を手許に残して軍旗の護衛に任じて、其他を擧げて悉皆吉野少佐に増加して敵を押し破らせんと試みたが、敵は中々優勢にして容易に戦況の發展を見るに至らなんだ。此の戸枝中佐のやり方も餘りに兵力を出し過ぎた感がないでもない。馬場少將は出し吝しみをやり戸枝中佐は出し惜しまな過ぎ、兩方ともに中庸を失なつたのは惜しむべしだ。

馬場少將の出し吝みは元より感心せぬが、さればとて餘りに思ひ切りよく増加を決行するのも考ものであつて。戸枝中佐は其本部の護衛として第十中隊の二分隊と聯、大隊本部を合して、銃數約十六挺を有するばかりとなつて仕

舞つた午前七時三十分頃、敵は其兵力を續々同村の西南に増加して我が高崎聯隊の右側に向つて攻勢に轉ぜんとするの氣勢を示して來た。これを感著いた馬場少將は包道屯を守備したる後歩第十五聯隊の第三中隊を前進せしめて、此の攻勢の状況を現はした敵に向はせたのであつたが。敵はこれを見て其前進を止めて、三臺子の西方に防禦工事を施こし。我後歩第十五聯隊の第三中隊は敵を距るゝ約七百米突迄進んでこれと互に射撃を交換した。此の包道屯から進出して敵の攻勢移轉を喰ひ止めたる中隊の參戰は、極めて時機に應じたる頗ぶる適當な處置であつて、其効果は實に偉大であつたと評者は思ふ。

西南部から進みかけた敵は停止したけれども、此間に於て敵の一部は三臺子の西北に進み出して來て、我高崎聯隊の背後に迫らんと企てゝ來た。折から朝霧が深かつたので速にこれを知るとが出來なんだが、少しく霧がはれると共に突然此の敵と遭遇して射撃を交へたる聯隊本部は、前にも述べたる如く銃數合計十六挺である全く何をすることも出來る筈がない。忽ちにして其

死 戦 ノ 長 隊 聯 枝 戸



畫 道 白 原 石 人 道 九 十 九

六人を失なつたので聯大隊副官はもとより、聯隊長戸枝中佐も第三大隊長栗野陽次郎少佐も、主計も軍醫も何れも死傷者の銃を執つて奮闘するといふ大苦戦。そこへ折よく歸つて來た下士斥候の七人を加へて、我に數十倍する敵兵を約三百米突の前に拒止して、三臺子にある味方の背後を死力を盡して完全に掩護したのであつたが。此の聯隊本部の苦戦の状況は僅か三百米突しかない第一線にも、又後方の旅團司令部へも知らせることが出来なんだといふのは。此邊一面は敵の銃砲の掃射地であつて、傳令を出しても到底生きて先方へ達するのは難かしいのであつて。此寡兵を以て苦戦に陥つたといふことを知らせることも出来ねば、またこれを勝田少佐も吉野少佐も、更に後方に約一大隊餘を有したる馬場少將も少しも知らなんだのは残念であつたが。其中に午前九時四十分頃になると、勇敢無双にして敵の此の優勢なる右側からの不意打ちを、少しも恐怖することなく僅か十五、六の銃を以て、しかも聯隊長自身銃を手にして喰ひ止めて居た健氣なる勇將戸枝百十彦中佐も、武運拙

なく終に敵弾に斃れて勇ましく戦死を遂げて仕舞つたのであつた。豫備たる第十中隊を惜氣なく戦線に送つた爲めに人少になつた所へ、敵が不意にこれに迫つたけれども後方にある旅團長は、此際約一大隊半の兵力を握つて居りながら、これに向つて一兵をも増加せなんだので、それで此の勇猛なる戸枝中佐を戦死せしむる様な惨戦に陥つたのであつて。兵力出し吝しみの馬場少將の處置は頗ぶる不同意であるが、一方戸枝中佐も亦餘りに兵力を惜しまな過ぎたので。不意の事變に應ずるに足る兵力を欠き此様な苦境に陥り、終に大切なる聯隊長の陣歿を見るまでに至つたのであつて。最後の豫備隊といふものは歩兵操典第一部第八十三に

『豫備隊ハ大隊長ノ直接使用ニ供セラルルモノニシテ大隊長ハ豫備隊ノ適當ナル使用ニ依リテ戦闘ノ變化ニ應ズルコトヲ得ベシ云々』
又同第二百三に

『豫備隊ニ關シテハ大隊ニ示セル要旨ニ從フベシト雖聯隊長ハ最後ノ時期ニ

至ルマデ若干部隊ヲ手裏ニ貯ヘ終ニ軍旗ト共ニ突撃ヲ實施スルモノトス』
とある所から見ても戸枝中佐が僅に二分隊を残して、其他を悉皆戦線に加へて仕舞つたのは確かにこれは適當でなかつた。それが爲めに不時の敵情の變化に應ずることが困難になつて來て、終には此の惜しむべき勇猛なる聯隊長を喪なつたのであつて。吝しみ過ぎては勿論よくないが、去りとて餘りに過早に使用して仕舞つてくれば不時の事變に何を以て應じ様ぞ、これ大に考へねばならぬことであると評者は思ふ。

こゝに於て勝田第一大隊長が戸枝中佐に代つて高崎聯隊を指揮して、堅忍不拔の意氣を發揮して三臺子を堅固に守備し、敵が繰返し々々決行したる小規模の逆襲を撃退して、寸歩も退ぞかず敵と相對峙して勇戦して居る中に。此日午後二時頃から第七師團が我が此の第一師團右翼隊の右翼に近づき、包道屯附近より南に向つて進出したので。右翼が頗ぶる安全になつて來たから、馬場少將は右翼警備の爲めに包道屯に置いたる後歩第十五聯隊第一大隊(第四

中隊欠を、三臺子北方約千米突の地に招致して豫備隊とすべく命令し。同大隊は前に出て居た第三中隊を收容して、所命の豫備隊の位置に到着したので、此方面の戦況は今朝に比較しては非常に順境になつて来たのであつた。

先是八日夜に於て左翼隊は觀音屯を夜襲する筈であつたが、馬場少將の高崎聯隊がそれより先に三臺子を夜襲して其勝敗が何れとも決せぬ九日午前三時、左翼隊長中村少將は其大部を以て前面の敵を夜襲せんとした其刹那、飯田師團長は此夜襲を中止すべく急命を傳へたので。終に夜襲を決行するの機を失なつて九日早朝から敵に進み迫りたるに、敵は漸次に其兵力を増加して頻りに攻勢的の動作をなし、窮鼠の反噬といふ必死の勇を鼓して逆襲し來り。此日正午頃左翼隊は爲めに一時若干の退却をしたけれども更に後方に控置したる諸隊の援助を得て、再び舊位置まで其戦線を推し進めたのであつたが。其後幾何もなく午後五時前後になると敵の潮の如き大軍が、俄然として飛塵濛々漠々咫尺をも辨ぜんんだ大風塵の中から現はれて、其戦線は觀音屯から

文官屯を経て其北方に互り、師團の左翼側をひつ包んで猛烈に攻撃前進を始めたので。一度退却癖のついた左翼隊は終に悉く田義屯に向つて、残念にも不覺にも殆んど潰走式に退却して仕舞つたので。三臺子と田義屯の間は全く敵に曝露するに至り、非常に我軍の爲めに不利なる状況を呈して來たが。丁度其前後に包道屯から三臺子北方約千米突の地に到着したる後歩第十五聯隊第一大隊は、其位置に於て直ちに其方向を東方に變換して、敵に曝露したる三臺子と田義屯との中間を占領して、我が高崎聯隊の背後を安全にすると共に、第七師團第一線の左翼をも掩護したのは、極めて適當なる處置であつて。是れ實に豫備隊が状況の變化に應じて、第一線諸隊に有利なる行動をなし得たるものであつて、前の戸枝中佐の失敗と正反對に、此豫備隊は確かに其責任に對して愧かしくない働きをしたのであつた。

前に高崎聯隊の大苦戦の折りに兵力を出し吝しんだ馬場少將は、其出し吝んだ豫備隊を此場合巧に使用したので、先づ少しは前過を償ふを得たといふ

を得様と思ふが。此九日の夜馬場少將は自から負傷したけれどもそれには少しも頓著せずして、自から三臺子に進出して將士を激勵し、本九日の夜に於て手擲彈、爆藥を併用して全く敵を三臺子より擊攘して、一舉鐵道線路に近づき以て敵の退路を遮斷せんと企圖したが、容易に敵も此の三臺子を明け渡すことを承諾せなんだのであつた。而して此九日夜から十日に互つては漸次我軍は大順境に居ることになり、隨分と激戦に激戦を重ねたけれども敵が愈々全敗に陥つたのが知れ互つたので、最早大なる危険に瀕する様な心配はなくなつて、連日の戦の爲め其兵力の減耗の頗ぶる甚だしかつた故に、充分に敵の退却を遮斷し得なんだのは遺憾であつたけれども、それでも相應に敵の退路を脅かして目に餘る大軍を潰亂に陥らしめたのであつて。此後に於ける高崎聯隊の戰闘は左して研究をするの價値がないのであるから、こゝに我此の高崎聯隊の戰況の叙述を終ることにして。さてこれからは例の如く此方面の露軍の戰闘の梗概を研究して、此の高崎聯隊の三臺子占領が如何に大偉勳であ

つたかを、明白に證據だてることにし様と思ふ。

黒鳩公將軍は我大山元帥にまんまと一杯喰はされて、言ひ甲斐なくも忽ち兩翼包圍の不利なる狀況に陥つたが。其兵力は我日軍に比して遙かに優勢なのであるから何とかして、其敗勢を挽回せんとして頻りと苦心して居る中に。耳を掩ひ眼を轉ずるの暇もなき疾風迅雷も管ならざる勢を以て、勇猛果斷なる乃木大將が殆んど其背後に侵入して仕舞つたので、愈々益々非常に危険なる狀況に立ち至つたけれども。多智多謀なる同將軍は中々戰況を悲觀せずして、最後の大逆襲を以て此の大危険地より脱出して以て其退却を安全にし。あはよくば乃木軍を西方に擊退したる勢に乗じて、日軍の兩翼包圍の爲めに大に薄弱になりつゝある、其中央方面に向つても攻撃を試みんと決心して。三月七日から準備を始めて其有力なる部隊を、八家子、大韓屯から三臺子、觀音屯を経て文官屯に至る二里半餘の線に集めて、八家子又は大韓屯を樞軸として左方に旋回しつゝ、我第三軍を西方に壓迫せんと企圖したのであつて。此大逆襲

に使用する爲めに編成したる北方兵團フオン、テル、ラウニッツ大將の兵力は歩兵三十三大隊、砲約九十六門。其右翼に連なれるムイロフ中將支隊の兵力は歩兵二十九大隊、砲約九十四門であつて、此の合計歩兵六十二大隊、砲約百九十門を以て、乃木大將の迂回軍を一舉西方に撃退せんとして、七日より八日に互つて必死の努力を以て其準備を整頓しつゝあつたのである。然るに八日に於て我第一師團が三臺子、觀音屯に向つて攻撃前進を始め、殊に其日の没する迄猛烈に三臺子を師團砲兵全力を以て猛射したので。敵の三臺子守備隊はつきりこれは夜襲の準備であると考へて、夜に入ると共に夜襲ならいつても來いといふ意氣込みで、三臺子も觀音屯も非常に嚴重に警戒して居たのであつた。

一方に於ては黒鳩公將軍の命に依りて、ラウニッツ大將とムイロフ中將とは明九日に於ける大逆襲に就て、充分なる協議を遂げたる後今八日の夜半を以て其運動を起し、明九日拂曉を以て敵に迫り大にこれを西方に撃攘せんと

して、其準備を必死になつて整頓し今少して運動始といふ八日の晩の眞夜中頃。反對に少しの時間の違ひで我が高崎聯隊に機先を制せられて、忽ち三臺子の一部を占領せられて仕舞つたので。此の逆襲の大主力たるべきラウニッツ大將の北方兵團は、極々少數なる此の高崎聯隊に鼻の尖にぶらさがられて、少なからず其攻勢移轉の勇氣を沮喪せしめられて。これを撃退して正々堂々と攻撃前進に移らんとして數回の逆襲を試みたが、我が高崎聯隊の進むを知つて退くを知らぬ勇士の戦には如何にしても勝つことが出來ず。終に此北方兵團は攻勢移轉に加入することが不可能である旨を黒鳩公將軍に報告するの餘儀なきに至つたのであつた。

大逆襲の主力が此通り高崎聯隊に腰を折られて仕舞つたのには非常に困つたが、其儘にして棄て、置けば七日以來急に變化したる露軍戦況の悲運は、終に全軍を奉天北方附近に於て全然覆滅せしむべき大危険に瀕して來たので。最初は北方兵團に加勢をさせる考であつたムイロフ中將支隊を以て、獨力此

の逆襲を決行せしめて最初の計畫に於て逆襲の主力たるべき、北方兵團の一部を以て此のムイロフ中將の逆襲を援助せしむることにした。即ち其計畫變更の逆襲こそは觀音屯から文官屯に互る線よりして、我が第一師團の主力を南東及び東方より包圍しつゝ攻撃前進し、終に勇敢無双を以て聞へたる第一師團の主力を田義屯に擊退し、其砲煩機關銃を遺棄せしむるが如き敗戦に陥らしめた九日に於ける敵の逆襲であつたのである。

若し此場合高崎聯隊が八日夜に於て、ビルゲル中將の歩兵七大隊砲二十四門を以て守れる三臺子を未だ占領して居らずして、彼のラウニッツ大將の北方兵團とムイロフ中將支隊の全力とが大韓屯を軸として、左方に旋回しつゝ乃木軍を逆襲したとしたならば何とする。折角靴下の中に追ひ入れたる鼠を安全に逃がすに至る位は勿論の事、我第三軍就中第一師團の如きは殆んど潰裂の運命を免るゝ能はなんだに相違ない。否々第三軍ではない第一師團ではない、或は爲めに全日本滿洲軍に如何なる不利を持ち來したか知れぬのであつ

たが。戸枝中佐の高崎聯隊が多少のやり損じがあつたとしても、敵が夜襲を覺悟してしかも我に倍する兵力で警戒して居た三臺子を、無双の勇戦をして其一部を占領して堅忍不拔勇敢無比に戦闘を持續し。彈丸が盡きても兵力が減じても、聯隊長迄が戦死するに至つても毅然として寸分も動搖することなく、堅固無双に守りをほせた爲めに流石のラウニッツ大將も、其鼻の尖端に喰ひ付かれた一疋の蚊にも比すべき此の聯隊の勇戦が邪魔になつて、如何にしても思ひ切つて攻勢に轉ずることが出来なんだのであつて。そこには此のラウニッツ大將の攻撃精神に多少缺くる所があつたには相違ないが、それはほんの副因であつて要するにこれ此の高崎聯隊の、八日夜半の大夜襲が機先を制して敵の要地を占領したのが抑、の主因であつて、こゝに敵の退却は絶體絶命非常に困難に陥るといふことになつたのである。果せる哉容易に過當なる稱賛を口にせざる乃木大將をして、後年其聯隊の有志者が戦史を編纂するに當つて、其題辭として『芳流千載』の美事な楷書の四字を贈るに至らしめた而

已か。此の奉天大會戰が終ると共に此の高崎聯隊は、こゝに第三回目の感狀を乃木大將から授けられたのであつて其全文を掲ぐれば實に次の如くである。『右諸隊ハ馬場少將ノ指揮ニ屬シ三月八日三臺子ニ向ツテ攻撃ヲ開始シ次テ同夜々襲ヲ以テ同村ノ大部ヲ奪取シ爾後激戰二晝夜ニ亘リ一方ニハ其西南隅ヲ死守スル敵ヲ驅逐シテ逐次其占領區域ヲ擴張シ他方ニハ屢々優勢ナル敵ノ逆襲ヲ擊退シテ多大ノ損害ヲ與ヘ遂ニ同村全部ヲ占領シ敵ノ退路ノ一要點ニ楔子ヲ嵌入シテ全軍ノ勝利ヲ偉大ナラシメタリ其功績顯著ナリト認ム仍テ感狀ヲ授與ス』

容易に人に許さざる乃木將軍が全軍の勝利を偉大ならしめたと稱賛し、更に快よく其聯隊の戦史に芳流千載の四字を題してくれたといふのは。千秋萬古に亘つて實に毛武兩州男兒の大なる誇りである、大光榮である我が高崎聯隊の不朽の名譽である、戸枝聯隊長たるもの死して餘榮ありといひつべしである。去るにても軍人中にも理由のないことに大切な生命を失なふ馬鹿もの

多い今日此頃、此の戸枝聯隊長の一死を回想して見たならば、如何に此の一死の價値の偉大なるかを更に驚かざるを得ぬのである。人の一死は斯くまで重大なる價値を有するものであるといふことを眞に了解したならば、愚にもつかぬことで自殺する様な腑甲斐ない考は、如何にしても起らぬ筈であらねばならぬと評者は憤慨に堪へぬのである。

開原曉發

成仁

邊外春深似故鄉。
 何人對此不悲傷。
 新楊綠暗巴々水。
 老杏紅殘曲々墻。
 昨夜關山落花雪。
 今朝遊子滿頭霜。
 南風五月開原路。
 蜀魄啼過天一方。

大正五年四月二十四日印刷
大正五年四月二十八日發行

(戰史評論與付)

著作者

無名戰士

發行者

宮本林治

印刷者

山田三次郎



發行所

東京市麴町區
平河町四丁目

宮本武林堂

電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番

東京市麴町區平河町四丁目十一番地

東京市赤坂區田町五丁目十一番地

T 氏 著

步兵中隊戰鬪教練

菊判洋布製
價六拾錢
郵稅八錢

內容

總論—中隊戰鬪教練ノ根本義—計畫(計畫ノ素因。計畫ト實施ノ關係。教育量。使用時日。地形。空包。想定……)—實施(指導法。教練ノ活氣。射擊指揮。援隊) — 講評 — 計畫實施ノ範例 — 結論 — 附表(中隊戰鬪教練ニ於テ教育スヘキ事項。第二期中隊戰鬪教練教育計畫表。同上細目教育計畫表) — 引用附圖(青山、代々木練兵場五千分ノ一圖)

本書ハ教育家トシテ。戰術家トシテ。射擊家トシテ。且ツハ所謂精神家トシテ常ニ世人ノ。而シテ軍隊ノ模範テウ名聲ヲ恣ニセシT氏ノ著ニ係ル權威アル罕觀ノ一書ナリ。其説ク所ノモノ。中隊戰鬪教練ノ根本主義ヨリ其實施計畫ノ細目ニ至ル迄順ヲ逐ヒ序ヲ尋ネ幾多ノ實驗ト統計トニ鑑ミ。解シ易ク且ツ直ニ實施シ得ル如ク懇篤細説到ラサルナシ。正ニ是レ大正現代ノ軍隊教育ニ向テ最も大ナル光明タルト共ニ最新ラシキ指針タラスンハアラス。由來中隊教練ニ關スル著書尠シトセサルモ本書ノ如キハ蓋シ空前ト言フヲ憚ラス。是レ敢テ世ノ中隊教育ニ任スル各官ハ勿論中隊以上乃至中隊以下ノ教育ニ參スル諸官ノ爲ニ座右ノ珍トシテ特ニ推奨スル所ナリ。

發行所 東京 東區 平河町 四丁目 宮本武林堂

五月刊行
戰史評論
豫告 威遠堡門開原附近の戰鬪

大正五年五月（威遠堡門、開原附近戰鬪）

戰史評論

宮本武林堂發行

戰史評論

無名戰士評
成仁武夫補

第三十四回

威遠堡門開原附近の戰鬪

我日本滿洲軍の大勝利を以て一先づ幕となつたる奉天大會戰の大活劇の後、敵は其大軍を遠く掏鹿、廟子溝、八面城以北に退ぞけて油斷なく再舉を計畫し、又我軍にては當時急追するの餘力を殘念ながら使い盡して仕舞て居たので、其各軍を鐵嶺法庫門の線以南の地に停止せしめて、これも亦更に前進の準備を必死となつて整へて居たが、此の場合前述の如く彼我兩軍の間には頗ぶる大なる距離が出来たのであるから、敵も味方も同様に全く情況不明難に陥るに至つたのは又已むを得ぬ次第であつて、就中潰亂して敗退したる露軍に於



大正
5. 6. 14
内交

ては一層此の敵情不明の傾向が甚だしく、我が滿洲軍が其後如何なる配備をして更に如何なる飛躍を試みんとして居るか、皆目不明であるといふてもよい程度に我軍の情況に不案内であつた。我軍に於ても勿論同様な困難には逢著したけれども、彼に比しては勝者であつた爲めに頗ぶる敵情に通ずるの便を握つて居たといへるので、左までに敵情不明難に苦心はしなかつたが、言ふ迄もなく今後に於ける自己軍の爲さんとする計畫を、たやすく敵に知られては極めて都合がよくないので、それを巧みに秘匿すると共に一方充分に敵情をも併せ搜らんとして、此の大距離の間に種々なる支隊が澤山に派遣せられて居たが。四月の初めに於ては鐵嶺附近に居た第十師團は、三岳於菟勝中佐の指揮する同師團の獨立騎兵を、遠く威遠堡門以北に進ましめて、騎幕に依りて敵騎の侵入を妨害すると共に敵情の搜索に力を盡し。其後方の中固附近に前田大佐の一支隊を出し、更に此の支隊中より丸山直寛中佐の率ゐる一支隊を開原城に迄派遣して、此方面即ち吉林街道の方を警戒して居たので

あつたが。兩軍騎兵の小衝突は殆んど連日の様に繰り返されては居たけれども、さてこれといふ程な著るしき戦闘は此吉林街道の方には起らななだのであつた。

此時第十師團の獨立騎兵隊長三岳中佐は、如何なる配備を以て敵に對して居たかといふと、騎兵第六聯隊第一中隊欠、同第十聯隊(約一中隊弱欠)、歩兵第三十九聯隊第一大隊(第一中隊欠)を率ゐて、威遠堡門附近に其主力を置いて、右は拘鹿から左は昌圖停車場に至る間を警戒して居たのであつたが。此の獨立騎兵の搜索隊たる騎兵第六聯隊第二中隊と歩兵第三十九聯隊第二中隊とが、威遠堡門から約二里東北に當る南城子に進んで搜索に従事して居ると。久し振で四月の二十二日の朝から吉林街道上の敵が何となく活氣を呈して來て、同日午前八時頃になると歩兵約三中隊、騎兵一中隊、砲六門の敵兵が、茶棚庵方向から勇ましく南進して來て搜索隊に對して攻撃を始めたので。此の歩騎兩兵より成る搜索隊は直ちにこれに應戦して、其趣を三岳中佐に飛騎を出して

報告すると共に、徐々に敵と觸接を保持しつつ、吉林街道を主力の方に退却を開始したが。殆んどこれと時を同じくして此の南城子から約二里半東南方にある、掏鹿へ通ずる道路上の頭營子に出してあつた、騎兵第十聯隊第一中隊の一小隊の方へも、歩騎兵一小隊位の敵が東北方より迫つて來たので。此の小隊も急報を送つて漸次に主力の方へ退ざいて來ることになり、こゝに愈々威遠堡門附近に於ける我が第十師團の獨立騎兵の戦闘の幕が開かれたのであつた。

以上兩方面よりの報告を暫時の後に接手したる三岳中佐は、敵が砲兵迄を引き連れて居る以上はこれは決して小搜索隊と看做すことは出來ぬ、思ふにこれは久し振で敵が一活動を開始したのであらふと考へたので。直ちに在威遠堡門の主力の中より歩兵第四中隊を、下觀子東方の天王山上に出して、三處に小隊毎の塹壕を作つて陣地を占領させ。残りの歩兵第三中隊は威遠堡門の東北村端に同じく工事を施して之に據らしめ、以て敵に壓迫せられつゝ、

ある搜索隊を收容し、敵を拒止するの準備を爲すと共に。一方騎兵第十聯隊第一中隊の一小隊を其中隊長に引率せしめて、本道左方の靠山屯に遣はし又同聯隊第二中隊(一小隊欠)を本道右方の毛家窩棚方向に出して、何れも敵の兩側から不意に侵入し來る場合に備へて警戒をさし、怠りなかつた。此三岳中佐の執りたる處置は極めて適當である、速力莫大なる敵の騎兵が主力となつて居るに相違ない所の、諸兵連合の稍有力なる敵の前進の常に異なる模様を聞いて。直ちに搜索隊を收容して敵を拒止する爲めに、本道附近に最も適當なる陣地を選んで歩兵を配備し、其兩翼に騎兵を派遣して敵の近接を警戒したのは實に最も當然であつて、此の處置に就ては評者も大に三岳中佐に同意するのである。

果せるかな三岳中佐の豫想の如く敵は決して侮どるべきものでなかつた。此四月二十二日の午前十一時前後になると我が搜索隊の棄て、退却したる南城子へ、直ちに敵の斥候は進入して漸次に其兵力を増加し、吉林街道を中央

にして其兵力を左右兩側に展開し始め、本道を進む所の主力の外に左側には李家林子、紀家屯、吳家屯等を経て靠山屯に向ふ歩騎連合の敵の一部隊があり。又右側の山地の方へも歩兵約六中隊程進入して我側背を窺はんとする模様であるが、搜索隊は容易に軽々しく退ぞかず、歩騎相協力して二道河子東端に於て之を拒止して居る中に、益、前面の敵兵力は増加するばかりであるので。左までに頑強に抵抗しては危険であるから、後方天王山、威遠堡門村端の主力の歩兵に收容されつゝ、漸次に威遠堡門の主力に合せざるを得ぬとになつたが。午後二時頃に至ると遙に見る敵の歩兵約二中隊は、吳家屯西方に聳だつ龍潭寺の高地に散開し、靠山屯に派出されて居た騎兵第十聯隊第一中隊は、之に對して健氣にも監視の眼を少しもゆるめず對峙して居る。其中に午後三時近くなると歩兵約五中隊程の敵兵が、二道河子東北の高地から冠河の河原にかけて散開して、愈、我主力の據れる威遠堡門の陣地に迫らんとし。又其後方遙なる船家子附近を遠く觀察して居ると、歩兵約一聯隊騎兵約一旅團の有

力なる敵兵が、展開しつゝ、南進するのが有り／＼と見へるのであつた。

三岳中佐は搜索隊を威遠堡門に收容して仕舞たる後此の有様を見て、此の優勢なる敵の南進は到底此微力では此地に於て喰ひ止め難いといふことを知つて。歩々抗拒しつゝ、開原に退却するの外に策がないと考へたものであるから、騎兵中佐長江虎臣をして其部下なる騎兵第六聯隊第二、第三中隊を指揮して後衛とならしめ。速に歩兵第三十九聯隊第一大隊を退ぞけて、四家子東方高地に據つて更に此敵を拒止せんと決心して、それ／＼各別に命令を下したる後、自から騎兵第十聯隊第三中隊を率ゐて急驅先行陣地の偵察に急そいだが。此命令の下し方も又其處置も至當であつて、評者は先づ此外に方法はあるまいと思ふのである。時を移さず此命令を受けたる長江中佐は威遠堡門附近に於て、歩兵大隊の四家子東方高地を占領したるまで敵を拒止するの配備をなし。其事終つたのが知れたる後は前馬市堡へ退ぞいて歩兵に射界を開いてやる手筈を定めたが。此時歩兵第三十九聯隊の第一大隊を指揮して居たの

は誰れあらふ、昔華族豫科學校といふものが士官學校内に特に設けられたる其時、先帝陛下の御選みにあづかつて其生徒となり、同校が暫時にして廢止せられると共に士官學校生徒に移りて士官となり。現に京都聯隊區司令官として舊堂上華族出身將校の寥々たる今日、陸軍部内に獨り異彩を放ちつゝある陸軍歩兵大佐子爵高倉永則君であつて。彼れは三岳中佐の命によつて機關銃二挺をも其配下に加へられたので、既に天王山を撤退せしめんとした第四中隊を其儘該山上に留めて、長江聯隊の騎兵二個中隊と相協力して敵を拒止し。烈しき敵の壓迫を受けるに至つた場合には、捷路によつて毛家窩棚西方の趙家溝附近の高地に向つて退却すべく命令して。自から第二、第三中隊と機關銃二挺を引率して急行四家子東方高地へ向つて退却し、途中から左折さして其第二中隊を該陣地に急歩先行せしめ。自から其他を従かへて四家子に向つて背進して、三岳中佐の豫定したる配備に就かんと、もみにもんで必死に道を急そがせたのであつた。

先是威遠堡門東北高地にあつたる騎兵第十聯隊第二中隊は、歩兵第四中隊の天王山撤退前後此方面を警戒して居たが、敵の迫り來ること豫想外に速なるによりて、彼は谷地をこへて同地南方の高地に移つて、我獨立騎兵の右側を警戒するの餘儀なきに至つたが。敵は我が前述諸隊の退却に就くのを見て少しも油斷せず、直に其跡を追ふて益、我に迫らんとし午後四時頃になると、敵の砲兵二門忽ち天王山北方の高地上に現出して、我陣地の各所を射撃しつつ我兵の在否を確める模様である。此時我が軍の方に於ては高倉子爵の歩兵三個中隊は、既に四家子東方高地を豫定の如く占領し、其右翼に機關銃二挺を配備して何時でも御座れと敵の進來を待ち構へ。其右翼趙家溝の東方高地には先に退ぞいて來た騎兵第十聯隊の第二中隊が警戒して居り。後衛たる騎兵第六聯隊の其第三中隊は既に四家子に達し、其第二中隊は本道を觸接を保ちつゝ徐々に退却し。先に右翼望寶山附近に派遣せられて居た騎兵第十聯隊第三中隊は退ぞき來つて四家子東端に停止し。左方に出たる同聯隊第一中隊

長の率ゐる一小隊は、高倉少佐の此方面に出してくれた歩兵第三中隊の一小隊と共に、今や退ぞいて後馬市堡の東端に達して此方面を怠りなく警戒して居た。

然るに敵は其二門の砲を二道河子西南に出し以て各方面を捜射したる後、大なる兵力が此附近に隠れて居らぬことを知り得ると共に、歩兵約一聯隊騎兵七、八中隊を以て威遠堡門及び其東西の高地を占領し。我が軍に於ても大なる抗拒をなさずして漸次に退却するのを見て、更に威遠堡門の線より南進を企だて勢ひ鋭どき模様を現して來たので。前馬市堡に在つて此情況を油斷なく偵察して居た三岳中佐は、更に開原站に退却して此地に敵を喰止めんとし、四家子附近にあつた歩騎兵を開原站北方の高地に退ぞかしめ。後衛たる長江虎臣中佐には依然其任務を續行さして、小坎子に退ぞいて後は右側を警戒せしめることにして。更に趙家溝東方高地に居た騎兵第十聯隊第二中隊に、大塔子から何家堡子の方向に退却して、我が右翼を警戒しつゝ、原聯隊に復歸

する様に命令した。

是日午前九時開原にあつたる丸山支隊長中佐丸山直寛は、南城子に出て居た第十師團獨立騎兵の搜索隊が午前八時三十分頃、敵の壓迫に堪へずして二道河子に退却したるの報を得て。大に心配をしてそれに對する心構へをして居ると、午前十時過ぎに在中固の前田大佐から左の如き命令が飛來した。

一、我獨立騎兵ハ優勢ナル敵ノ壓迫ヲ受ケ逐次退却ノ途ニ就ケルモノ、如シ

二、貴官ハ成シ得ル限リ多クノ兵力ヲ威遠堡門附近ニ急派シ獨立騎兵ヲ應援スベシ

此命令を受ける前から略、これと同一の心構へをして居た丸山中佐は、現在北方に向つて前哨の任務に服して居る、歩兵第三十九聯隊の第十二中隊と第十一中隊の一小隊、及び開原城にある歩兵第三十九聯隊第一中隊だけを手許に残し。歩兵第三十九聯隊第三大隊の第九中隊の一小隊と、第十、第十一中隊

(二小隊欠)即ち現員二中隊を其大隊長横地長幹少佐に率ゐしめて。退却に退却を重ねて前馬市堡に停止して居る三岳中佐の所へ、午後の三時過ぎに歩度を伸して駆け著けさせたのであつた。此横地少佐の二中隊が到着して少しすると敵の大兵力が、威遠堡門を占領しても停止せずして尙益前進を繼續して來たので。三岳中佐は其増援隊二個中隊を以て、開原站北方約二千米の高地を占領して、獨立騎兵を收容することを横地少佐に希望したのであつた。

横地少佐は直ちに三岳中佐の希望に應じて、獨立騎兵の退却を右方から收容するに適當なる、彼の開原站北方高地の十字路のある東方に其兵を進めて、速に收容陣地を占めさせこゝに三岳中佐諸隊の收容を引き受けたが。敵は前面一帯に益増加する模様であるので、騎兵第十聯隊第三中隊は退ざいて此高地西方の趙家台に至つて左側を警しめ、歩兵第三十九聯隊第一大隊は其第四中隊を後衛として退却して。午後六時前後其主力は横地少佐收容陣地の右翼後の谷地に達し、其第三中隊と機關銃二挺は開原站の東北端を占領して敵に

備へた。更に獨立騎兵の後衛たりし長江虎臣中佐は敵と觸接を保ちつゝ、退却して、同日午後の七時前には開原站の右方にある、小坎子へ其聯隊の二中隊を集結し得たのであつた。

然るに敵はまだ、其追撃の手を緩めずして、優勢なる歩兵を以て本道上を進んで四家子の東方を占め、其一部は四家子西南端に達して我が騎兵第十聯隊第二中隊の寥家窪子にあるものと戦を交へ。其後方には趙家溝北方の本道上にも又威遠堡門にも有力なる後續部隊があるのは確實であつて。左方大塔子の附近には騎兵の大部隊が我右翼を窺ふて居り。右方後馬市堡から留蓋菜勾の間には、別に北方より進來したと思はれる騎兵の大部隊が近迫して來て、此の中には歩兵も約二中隊程は加はつて居る模様であつたが。寡弱なる横地少佐は少しも恐れず此の前面の敵と銃火を交換しつゝ、獨立騎兵全部の收容を完全に終らんと努力して居たのは頗ぶる健氣であつたが。此際我軍の形勢は實は極めて面白からぬ有様であつたのである。

三岳中佐は前述の戦況からして考へて見ると敵は非常に優勢である。然るに我は騎兵五中隊、歩兵五中隊、機關銃二挺であつて、敵には少なくとも六門程の砲まであるのであるから、此様なさして堅固といふべき地でない所で永く此の敵と對峙して居ては危険であると考へたので。横地少佐の隊の方へは別に何等の交渉することなくして、午後七時に獨立騎兵だけに命令を下して高倉少佐大隊の第三中隊と、騎兵第十聯隊の第三中隊とを三家子附近に残して、其他をあげて開原に向つてさつさと退却して仕舞たのであつた。横地少佐の陣地の方では其前面に現出したる敵の歩騎兵と交戦して居る中に日が没したので、自然と戦は中止の姿となつて來たのであつたが。敵も日没に際して長追するのは危険であると考へたものと見へて、四家子東方高地から後馬市堡北方高地に亘る線に停止して前進を企だてななんだので、先づ此の夜は此の儘で大なる出來事もなく過ごし得たのであつた。

前にも述べた如く此場合丸山中佐は殆んど全力を擧げて、其歩兵二中隊を

以て横地少佐に與へて三岳中佐の獨立騎兵に赴援させたのであつて。爲めに北方に出したる前哨第十二中隊と第十一中隊の一小隊が、開原から遠く離れて孤立して危険であると考へて、それを開原に近よせる方法までして三岳中佐の爲めに盡力して居たのであるのに。三岳中佐は其赴援した横地少佐に收容陣地の注文を出して、彼れに收容してもらつたのはよいが。到底永く抗拒することが出來ぬと知つて、三家子に歩騎各一中隊を残して横地少佐にお構なく、開原城内へ歸つて仕舞たのは評者は少しく不同意である。如何にも敵は非常に優勢である上に、單に吉林街道からばかりでは無い、北方からも有力なる一部隊が加はつたらしいのは事實であるから、如何にも此開原站附近で敵を喰ひ止めることは容易であるまい。左すれば夜暗に乗じて適當なる配備をなしたる上、開原へ退却してこれを防ぐも至當であらふ。乍併前面の敵は近く大塔子から四家子、後馬市堡に亘つて、約六千米突の正面を以て我に迫りつゝあるのである。我が三岳獨立騎兵が少數な歩騎兵を位置稍後退したる

三家子に残して、開原さして退却したのはまだ日没の前であつて。これを若しも敵が認めて本道から尾撃して來たらば何とする。此夜或は開原が守れぬ様になるかも知れぬ大危険がある而已か、現在收容陣地に就いて居る横地少佐は退路がなくなる譯ではないか。であるから三岳中佐が開原に退却すると決心したならば、横地少佐にも其詳細を申聞かして納得さして。又丸山中佐にもよく／＼其事情を通報して其手筈を定めて、此夜に入るを待つて敵に知られぬ様に退却するが至當である。「丸山中佐が此後のことは引き受けるであらふから俺は開原で休む」といふ様なやり方は、評者は同意せぬ而已か第一全く横地少佐や丸山中佐と、三岳中佐諸隊との間に連繫といふものが斷絶することになるのは面白くないではないか、否、面白くない位ではない全く敵に乘すべき隙を示すのであつてこれは甚だ不利である。三岳中佐も終日の惡戦に疲れはてたので、何の惡意もあつたのではあるまい、自分を收容に來てくれな後方部隊に一切を譲つて、やれ安心と休憩する考であつたのであらふが。

充分に丸山支隊と連繫交渉したる後、夜に入つてこれを實行せずして、手前勝手に獨擅僭行をやつて仕舞たのは實に手ぬかりであつたと思ふ。幸に敵が尾撃して來ななんだから大した失態も生じななんだが、若し此場合ツマノフ公爵閣下が一奮發してぐつと突進して來たならば、横地大隊は非常な危険に陥るのみか、敵は此の夜開原城下まで直ちに迫るに至つたかも知れぬのであつた。これ實に三岳中佐の不注意不親切といふ責任は何としても免かれまい。

以上の如く三岳中佐が自分一人は御役御免になつた考で、さつさと開原城内へ退却して仕舞たので。横地少佐は非常に驚ろいたけれども、日中だけは其前面に敵の歩騎兵が迫つて居るので、如何にしても動くことが出來ず、其儘に陣地に就いて戦つて居たが。日没になつて敵が一先づ後馬市堡の高地に停止したのを確かめて、枚を衝んで肅々として開原に向つて退却を始めたが。午後十一時前後に三家子へ來て見るとそこで丸山中佐の命令があつて、直ちに九社に退ぞいてそこに宿營して、三家子の第三中隊と相連絡して警戒に任

すべき命令を受けたので。横地少佐はこゝから更に九社に向ひ轉進して翌二十三日の午前一時に同地に達し、第十一中隊(一小隊欠)を前哨として東北方を戒めつゝ警急舎營したのであるが。若し最初から三岳中佐が横地少佐と交渉するか。左なくば丸山中佐と相談して退却すれば、明日大に戦かはねばならぬ大切な此の大隊に、徹宵行さつ戻りつ運動させる様な徒勞をさせんでもよかつたのみか。立派に九社から三家子溝家屯又は北地に亘つて完全な前哨を設けて、極めて安全に敵に對して警戒することも出来たのであるが。三岳中佐も氣がきかねば丸山中佐も餘り注意のよい方でなかつたので、此夜横地少佐の隊は元より北方前哨にあたつて居た、第十二中隊と第十一中隊の一小隊迄が、徹夜無駄骨折りをやらせられたのは、實に評者は餘りに不注意千萬で馬鹿くしく感じられるのを禁じ得ない。兩個の支隊が一地に於て互に相助け合ふて戦闘する様な場合には、決して困難を他に譲る様な卑怯な交渉に時間を費やしてはならぬが、出来得る限り互に交渉して能く連繫し敵に乗ぜら

れる様な隙を作らぬ様にせぬと、思はぬ所で思はぬ大失敗を蒙るものであるから、これは大に將校たるもの、銘心して居るべき事柄であると評者は信ずる。

三岳獨立騎兵に對して優勢なる敵が壓迫して來るといふ報告に接したる、第十師團長安東中將は直ちに前田大佐の手から丸山支隊をとりあげて、師團長自身の直轄としてこれに兵力を急に増加せしむることにした。即ち其増加隊は在中固の歩兵第三十九聯隊の第二大隊と、在鐵嶺の砲兵第十聯隊第一大隊(第一中隊欠)であつて、これは直ちに急行して開原に向はしめたが。鐵嶺からの砲兵には別に歩兵第二十聯隊第七中隊を護衛に附けて、これもおまけとして丸山支隊に加はらしめ。別に工兵一中隊(一小隊欠)をも丸山支隊へ増加して、左の如き要旨の命令を丸山中佐に下すと共に三岳中佐にも別に命令が來たのであつた。

一、貴官ノ支隊ハ爾後師團ノ直轄トス

二、在中固歩兵第三十九聯隊第二大隊、在鐵嶺野砲兵第十聯隊第一大隊第一中隊、歩兵第二十聯隊第七中隊、工兵第十大隊第二中隊（一小隊欠）ヲ即時出發貴官ニ増援セシム

三、貴官ハ三岳中佐ト協力シ威遠堡門ノ恢復ニ勉メ如何ナルコントロールモ開原ヲ棄ツベカラズ

四、三岳中佐ニハ貴官ト協力シ專ラ吉林街道以南ノ敵ヲ拒止スベク命令セ

此の命令を受けたる丸山中佐は、我に迫れる敵を歩兵約一旅團、騎兵十數中隊と判断したので。到底威遠堡門を恢復することは困難であるが、開原に於て此の敵を防禦するのは至難でないかと考へたので。來援すべき諸隊を豫算に入れて、先づさし當り自分の手中にある諸隊と三岳中佐の隊とを以て、明日開原を守備するの計畫を立て徹宵其準備をして居たのであつた。

此場合丸山中佐は敵を歩兵一旅團、騎兵十餘中隊、砲五、六門と判断したといふ

が、此敵は果して何の爲めに前進を企てたのであらふか、單に我軍の配備を知らんとするものであらふか。又は爾後の運動に利益する爲めに先づ開原を占領せんとするものであらふか。其兵力の優勢なると其計畫が頗ぶる大規模で、東北及び北方から開原に迫らんとする所を見ると、單に我が開原の兵力を偵察するものとしては餘りに大袈裟に過ぎる様である。して見るとこれは開原を占領する目的を有するものと判断するが至當であらふ。此我軍の爲めに頗ぶる憂ふべき目的を以て進んで來た強敵は、今や近く開原から二里内外の地まで迫つて居るのに、丸山中佐は現在歩兵五個中隊と外に機關銃二挺を三岳中佐から譲り受けて持つて居るばかりである。これで廣大なる吉林街道以北の地區にある敵に當らねばならぬ。又三岳中佐はといふとこれも前に歩兵第三中隊と騎兵第三中隊を出して居るので、其手の中には歩兵第二、第四の兩中隊と騎兵兩聯隊を合して四個中隊足らずを持つのみであつて、これで吉林街道以南の地區を負擔することになるのである。で兩隊合して總計歩兵

八中隊、騎兵五中隊、機關銃二挺で、明日増援たる歩兵五中隊、砲兵二中隊、工兵一中隊の到着まで敵を拒止せねばならぬ。此増援隊が明日早く到着するものとしても、概數歩兵一聯隊、騎兵五中隊、砲十二門、工兵一中隊、機關銃二挺といふ計算であるから、約略今丸山中佐の判断したる敵の兵力の半分である。これは全部到着したる場合の計算であつて、現在では殆んど敵の三分の一にも足らぬ寡兵であるから。此兵力を以て敵を防いで開原を守らんとするには、可成其戦闘正面を短縮し其兵力を集結して、持久的に堅靱に敵の前進を拒止して増援隊の來著を待つの外に策はない。場合に依つては開原の諸城門を閉ぢて其堅固なる壁上に據らねばならぬことになるかも知れぬ、此の考を以て防禦の計畫をしたとしたならば、評者の考案としては大略左の如き配備を取つて増援隊の到着を待つのがよいと思ふ。

若しも評者が丸山中佐であつたとしたならば、其現在の歩兵を以て馬家屯から北地の間を占領し、馬家屯に第九第十の二中隊と北地に第十一、第十二の

二中隊とを配備し。北地の兩中隊から一小隊若くは半小隊づゝを取つて、それを南羊舖南方高地と戴家屯北方高地とに派遣して、北方よりの二條の主要道路を監視せしめ。其北方遠く三岳中佐の騎兵一中隊内外を出して敵を警戒せしめ、残りの第一中隊と機關銃二挺を豫備として開原東門附近に控置する考である。又獨立騎兵方面に於ては大略三岳中佐の實際の處置の如く、其歩兵二中隊を以て九社を占領して、馬家屯と九社との兩部隊の中間に騎兵中隊を出して警戒せしめ、右翼小台子には長江中佐の騎兵第六聯隊を派遣して、我右側を充分に警戒せしめて。此配備の詳細を開原站と三家子に残して觸接に任じたる歩兵第三中隊と騎兵第三中隊に通報して。退却に當ては古家子から冠河に沿ふたる道を取り、九社に於て主力に合すべく命令するのが至當であると思ふ。而してこれ等の處置は少なくとも二十三日の早朝迄には、全く其配備を充分に終了整頓して置かねばならぬと評者は思ふ。其故は敵は僅々二里足らずの四家子附近にあるのであるから、何時壓迫を受けるかも知れぬ

が多分は明早朝から攻撃を始めるとするが至當であらふ、であるから是非明拂曉までに陣地を完成するのが必要である。斯くして堅忍増援の到着を待ち其戦況の變化に應じて、來著したる砲兵をば豫め準備したる城北又は天齊廟南方の陣地に出して、敵に優る砲の威力を以て烈しく敵の銳鋒を挫き。更に來著したる歩兵五中隊の一部を以て、臨機其戦況の危険なる方面に増加し、其主力をば開原城東門附近に置いて豫備とするのが評者は極めて至當であると思ふ。

三岳中佐は稍、評者の意見と似寄つた配備をしたけれども、其兵を三十三日の午前七時に集合してそれから陣地に就いたとは何事である。四月下旬になれば午前五時から最早夜は明けるのである。此の危急の場合に於て悠々閑々にも程のあつたものである。敵が若し眞面目に開原を占領せんとしたものであつたならば、三岳中佐の寢て居る中にたしかに開原城下に敵は迫つて居たに相違ない、何といふ大油斷大不覺であつたらふ實に怪しからぬと評者は思

ふ。單にそれ而已でない二十三日の午前八時半には三岳中佐自からが、歩兵二中隊及騎兵一中隊を握つて九社に前進して此地を占領して居りながら。僅か半里餘りの三家子から開原站北方高地に居る、部下の觸接に任じた歩騎兵兩中隊に向つて、何等其退却に付ての注意も命令も與へざりし而已ならず、自分が九社に出て來たといふことをも此兩中隊に傳達しなんだ様に思はれる。若し九社に三岳中佐の主力が居るのを知つて居たならば、此の歩騎兩中隊は必ず九社に退路を取つたに相違あるまい。然るに三岳中佐が其注意を怠つた爲めに、彼等はすん／＼馬家屯に向つて本道を退却して仕舞たので、左なきだに少ない三岳中佐の兵力は爲めに益、減少して仕舞い、過早に退却せねばならぬ様な羽目になつて。残念にも丸山中佐から頑強防止を希望される様な、頗ぶる不體裁を演ずるに至つたのである。

又丸山中佐は何としたかといふとこれも頗ぶる散漫極まる配備を取つた。即ち歩兵第一中隊に機關銃を附して馬家屯を占領し、他の歩兵一中隊に北地

を占領せしめたのは先づ宜いとして。歩兵一中隊を遠く北方南羊鋪東南に出して北方の敵に當らしめ、戴家屯北方に一小隊を出して此の道路を警戒したが。何分にも主要防禦正面たる馬家屯から北地を経て潘家屯西方高地に亘る、約一里に餘る廣大なる正面に、僅々歩兵三中隊を配備したので其薄弱なること實に言語同斷である。で更に後に至つて歩兵二小隊を潘家屯西方高地に増加して、東門外に第一中隊を豫備として控置し増援隊の到着を待った。此の配備の散漫至極であることは何人と雖ども之を非認するものはあるまいが、更に大に咎むべきは寸刻も速に此の配備を完成せねば、丸山中佐支隊の任務が盡せぬ様になるのは目前であるのに、何をして居たものであるか知れぬが、此の方面の陣地構成を終つたのは午前十一時であつたとは、實以てあきれが見舞に來る程な悠長さであると評者は思ふ。

此場合如何なることがあつても開原を敵手に委してならぬのは師團の命令に示す如くである、からして丸山中佐たるものは此の師團命令を受けると同

時に、其防禦の配備に關する命令を下して速に其陣地に就かしめて、直ちに徹宵陣地の構成にかゝつたならばさつと早朝までには陣地は出來あがつたに相違ない。といふのは第十二中隊が防禦命令を午前二時半に受けたと戦史に書いてあるから、遅くも此命令は三時前後には全支隊に行き亘つたに違ひあるまい。左すれば其位置を轉ずるには一時間内外で間に合ふのであるから、午前四時か五時には何れも所命の地に達し得て、それから直ちに工事に著手したならば、よしや少しは遅れてもまさか午前十一時までも其陣地構成に時を費やす筈がない。幸に敵が極めて緩漫至極な公爵様や伯爵様揃いの殿様であらせられたので、これも大いに朝寢を遊ばして午前十一時頃から前進を始めたらからよかつたけれども。若しも敵が平民的に早起して早朝攻撃して來たとした場合には、丸山中佐の防禦線には一兵も居らぬ中に、敵は馬家屯北地の線を突破して仕舞て、此の二十三日の早朝には確に開原城下に迫つて居たに相違あるまい。實に危険も危険此様なあぶないことはないではないか。勿論

評者の考案とても決して充分ではあるまいが、此様な寡兵を以て大敵に對する場合に當つて其兵力を散亂せしめて諸方に分離するの危険であるのと。その又配備に就くのが餘りにゆつくり過ぎるのに實は大に驚嘆したので、此大倦怠に向つて大筆誅を加へたのであつて。若しも敵の眞目的が開原占領にあつたとしたならば、丸山三岳兩中佐ともに此朝全く其任務を實行する能はずして、開原を棄て、中固方面に退却するか、或は辛ふじて開原城壁にかぎり付いて敵を防ぐといふ様な、極めて見苦るしき苦戰に陥つて居たであらふと評者は思ふのである。時機の如何をも辨別せずして悠悠閑々と時間を徒費する様な態では活氣のある戰鬪は出來ぬ、斯くては常に敵に機先を制せられる様になるものと平素から覺悟して居るがよいのである。

明れば四月二十三日の朝である、昨夜來の計畫を直ちに實施して其工事等はまだ著手されなんだが、兎に角午前の八時半に三岳中佐が九社へ到着したのを最も遅きものとして、豫定の如く丸山支隊も獨立騎兵も相連繫して陣地

に就いたが。其配備は如何にあつたかといふと吉林街道以南に於ては、長江中佐の騎兵第六聯隊の二中隊は獨立騎兵の前衛として小臺子を占領して、我右翼を警戒して遠く羊馬大屯方向を搜索し。其主力たる高倉大隊の歩兵二中隊と騎兵第十聯隊第一中隊は九社を占領してこゝに防禦工事を施こして吉林—中固街道の要衝に控へ。昨夜以來三家子及び開原站北方高地に留めた歩兵第三中隊、騎兵第三中隊は、何れも其儘敵と對峙して其位置を守りて吉林—開原街道を警戒して居り。更に丸山中佐の支隊の方は如何にといふと、横地少佐は其第九中隊と機關銃二挺を以て馬家屯を占領して、此村端に東及び南北に向つて防禦し得る様に防禦工事最中であつて。其北方約二千米突を隔てたる北地には同少佐の第十中隊が東北に向つて同じく陣地の構成に熱申して居り。一度昨夜城北附近と戴家屯附近とへ呼び戻されて居た、第十二中隊と第十一中隊の一小隊は、何れも舊位置たる南羊舖南方高地と八里庄東南高地とへ再び出かけて工事を施こし。そして殘餘の第一中隊と第十一中隊の二小隊

は開原東門外に位置して丸山支隊の豫備となつた。即ちこれが二十三日の朝に於ける我軍の開原防禦の配備であつたのである。

此様な兵をばらまいた様な散亂を極めた配備の仕方である上に、其防禦の工事なども不完全で今が其最中であつたのであるが。幸にも此の悠長なる防禦に對する敵兵が、やはり不思議千萬にも暢氣千萬なるものであつて、此の早朝から攻撃にかゝるかと思つて居たのに少しもそんな模様はなく。依然として昨夜の位置と同一なる前後馬市堡附近の線に止まつて、午前九時頃になつても少しも前進の様子がなないのであつた。其中に安東第十師團長が徹夜急行せしめた増援隊は續々として開原に近く進んで來たので、一先づそれを開原南方の謝家屯に停止せしめて戰況の變化を待つた。そして此の増援の到達で少しく安心したる丸山中佐は、孤立して其北方に遠く突出して居る第十二中隊の方の極めて手薄なるを感じて、それに第十一中隊の二小隊を豫備隊中から派遣して、第十二中隊と協力して潘家屯西方高地を守らせたのであつた。

成 編 禦 防 〃 壁 城 原 開



畫 道 白 原 石 人 道 九 十 九

昨日夕方以來單に吉林街道からばかりではなく、敵が北方からも進んで来る様な模様があつたが、今朝來の有様を考へると確かに北方横道河子の方からも敵が近迫するらしい。そこで丸山中佐は其來著したる砲兵の爲めに、城北附近に陣地を定めて北方及び東北方を射撃し得る如く準備した。此砲兵陣地は北方横道河子に通ずる道路と吉林街道を射撃し得るので、先づ適當であつたと思ふが。まだ此の場合歩兵も砲兵も謝家屯附近にあつて、何れも陣地に就くには至らなないのであつた。

午前十時過から十一時になると、昨夕開原站北方高地と三家子とに三岳中佐の残して來た、歩兵第三十九聯隊の第三中隊と騎兵第十聯隊の第三中隊は、吉林街道兩側より歩兵一大隊、騎兵二中隊程の敵に壓迫せられて、其前進陣地を守ることが不可能になつたので退却を始めたが。既に二時間程前から近く九社迄前進して陣地を占領したる三岳中佐は、昨夜残した此の兩中隊へ今朝以來何等の交通をもせなななので。近く本道の右側に其主力が居らふとは夢

にも知らぬ兩中隊は、横地少佐の第九中隊の占領したる馬家屯の正面を避けて、其主力のある九社の方へ退却せずして、吉林―開原街道を開原に向つて退却した。此の退却に尾して敵騎一中隊は趙家台に他の小部隊は古家子及び三家子に侵入した。即ちこゝに悠長なりし敵兵も愈、二十三日に對する攻撃に移つて、今や開原を一舉に占領するの氣勢を現はしつゝ前進する。

午前十一時過ぎになると敵は益々増加して、多數の歩騎兵は前馬市堡及び後馬市堡西方高地に充滿して、其一部は右方中固に通ずる街道を九社に向つて前進し、他の一部隊は左方北地の方向に分進するといふ有様であつて、敵の兵力は中々以て丸山直寛中佐が判断した位のものでないらしいのであつた。この間も時は遠慮なく経過して稍、正午近くになるといふと、敵は益々前進して其大部隊が開原站と趙家台西北高地とに現出して、三家子には歩兵が一中隊古家子には騎兵が一中隊進入した。それと相前後して午後一時を稍、過ぐる頃となると、其位置はたしかではないが楊家店の南堯溝の北方附近から、敵砲

約二門が砲撃を開始して、頻りと吉林街道上の馬家屯陣地と左方小台子の長江騎兵聯隊とを射撃し始めた。

斯くて吉林街道方面の戦闘が益々發展しつゝある間に、今朝來我軍に於て非常に懸念しつゝあつた北方から愈々敵が現はれて來た。即ち趙家台西北高地に現出したものとは確かに別物であると思はれる所の、歩兵約一中隊潘家屯北方高地に現出して、我が横地大隊の第十一、第十二兩中隊と射撃を交換し。其内に歩兵部隊が潘家屯に進入すると共に、其後方の羊舖にも約一、二中隊の敵が進入したが、まだ後方には大なる後續部隊があるらしいのであつて、それが午後三時前後であつたのであつたが。早くも此戦況の變化を知つたる丸山中佐は、直ちに急使を謝家屯に發して歩兵第三十九聯隊第二大隊、同第二十聯隊第七中隊を、回々營附近の開原東門外に招致すると同時に、砲兵第一大隊(第一中隊欠)にも急命して、豫定の如く城北西北方の陣地に進入せしめたのであつた。

此の二十三日に於て丸山中佐が、廣大にして到る所手薄千萬なる右は小台子から左は潘家屯西方に亘る、正面二里の防禦線の戦況變化を顧慮して、午前九時前後に到着したる歩兵五中隊砲兵二中隊を、單に自分の支隊の方のみ近かよせずして、吉林街道方面に赴援するにも便利なる謝家屯附近に停止せしめたのは同意である。敵は其主力が吉林街道を前進して來たのは明白であつて、昨夜はこれが威遠堡門附近に宿泊したに相違ないから、想ふに今朝敵は此方面から運動を始めて、進んで開原、中固の間を遮断せんとするかも知れぬ。それが爲めには此の増援隊全部を三岳中佐の獨立騎兵の方へ加へて、これと對抗すればよいのであるが一面には北方横道河子方向の敵の模様が、昨夕以來何となく頗ぶる變であるのであるから、萬一早計に三岳中佐の方へ増援隊を皆な加へて戦闘して居る時に、若し北方から大兵力の壓迫を受けることになると大變である。そこで丸山中佐は先づ一番早く危険の迫りさうな吉林街道の方へ赴援するに便利であつて、更に北方潘家屯の方へも赴援に甚

だ不便でない所の、此の謝家屯に歩砲兵を停止さして置き、戦況の變化に眼を配つて居たのであつたが、丸山中佐の案じた如く敵は有力なる部隊を北方から進ませしたので、こゝに同中佐は其増援隊を回々營に進めると共に、砲兵二中隊にも陣地進入を命じたのであつて、此の豫備隊の位置及び其前方招致の時機は共に大に適當であつたと思ふ。これ等の諸隊は敵のイワノフ大佐とトルベッコイ公爵との支隊が、大兵力を此方面に展開して、我が陣地の左翼へ迫りかけたる、午後二時半から三時頃の間丁度其指命の地に到着して、砲兵第一大隊の二中隊は午後三時から、潘家屯及三家子の兩方面の敵に向つて猛烈なる砲撃を開始して、攻撃し來れる敵兵の膽玉を大に驚かせてやつたのであつて、其間に到着したる工兵中隊一小隊欠を、丸山中佐は油断なく直ちに開原東方城壁の方へ急行せしめ、此の壁上に砲兵及び機關銃の陣地の構築に著手させた。此の萬一の將來を顧慮したる陣地の豫備工事も、評者は實に適當至極であるといふに躊躇せぬものである。

三岳中佐の獨立騎兵の方では、漸次前進して來た前面の敵兵は午後一時少し前に於て、其騎兵約三中隊が揚家店に進入し。これと火戦を交へて居る間に小坎子南方から、敵の歩兵約一大隊砲三門が此村落の東北の地區を、勇ましく散開して前進し古家子、三家子を占めたる部隊と協力して、九社に於ける三岳中佐の主力に向つて攻撃を開始した。三岳中佐は高倉少佐に命じて其歩兵第二、第四兩中隊をして之と對戦せしめ、騎兵第一中隊を下馬さして之に加へて奮戦したけれども、敵は益々兵力を増して益々近迫するので如何ともするところが出來ぬ。其中に敵は歩兵一中隊を堯溝東方高地附近に現出さして、漸次南方へ前進する而已か前面の敵は益々九社へ近迫する。そこで三岳中佐は長江騎兵聯隊を揚木林子に、主力を八社に退却せしむることに決心して、午後二時前後に命令を下し決心通りにこれを決行したのであつたが、此退却は評者は少しく過早であつた様に思ふ。其故は敵の此方面に向つたのは歩兵約一大隊と騎兵二中隊程であつて、我には歩兵二中隊、騎兵三中隊あるのである。

敵の約半數以上の兵力を有して居る上に、遙かに馬家屯の味方と連絡しつゝ、防禦して居るのであるから、堯溝東方高地に敵が一中隊現はれたといふ位の原因で退却せずして、今少し此所で此前進する敵兵を散々に苦しめて。愈々背後が危険になつたならば速に八社に退き、こゝでも亦一防禦をして歩々退却して、可成時間の餘裕を作る様に心掛けねばならぬのであつたが。六、七百米突前方に敵が現出すると共に早手廻しに八社に引きあげたのは至當でない。くどい様だが此場合前に開原に退却したる此支隊の歩兵一中隊、騎兵一中隊が、此の三岳中佐の方面に退却して居てくれたならば、殆んど敵と匹敵するの兵力であるから、大に都合がよかつたであらふに惜しいことをしたものである。其中には少ないけれども丸山中佐が後に出したる歩兵一小隊を以て、寇河の西北にある無名の村落を占領する様にすれば、敵も容易には九社へ突進して來ることは出來ななだであらふと思ふ。然るに三岳中佐が前述の歩騎各一中隊を自己の主力に合する方法を講ぜず、其上早く八社に退却して仕舞たの

で敵は大に勢を得て、直ちに九社を占領して八社に向つて更に攻撃を開始した。既に引き癖のついたる三岳中佐は又八社をも過早に棄て、郎家屯に退ざいたが、終にこれをも守りをほせずして午後四時頃から、清河南方の五里河子に退ざいて河を前にして此敵を喰ひ止めんと苦心したが。此退却は全體に亘つて評者は過早であつたと信ずるもので、よしや多少の危険が迫るとも今少し持久するの必要があつたのである。

由來日露兩軍とも騎兵が歩兵から攻撃されると、過早にこれを避けて退却するのを能事としたる傾向があつたのは、此の日露戦役に於ける争をはれぬ事實であつて。無数な大騎兵を持つて居た露軍に於ては、此の騎兵の過早に陣地を棄てた爲めに、其計畫を破壊されたり又は敵に其虚に乗ぜられたりしたことは、一度や二度ではなかつたのである。それとこれとは事かはれども此場合の如きも、此の三岳中佐の獨立騎兵は昨日の夕方に於て、丸山支隊には何のお構もなく過早に陣地を棄て、開原に退却したのであつたが。又此の

二十三日に於ても少しく敵が近よつて來ると、これを充分鞏強に拒止して然る後に退却せず、堯溝東方高地に敵の歩兵が見へると同時に、まだ危険が迫つたのでもないのに九社を棄て。九社が直ちに敵に占領せられて其村端の射撃と、堯溝附近の砲兵三門とに砲撃を指向せられると、大なる損害も危険もまだく迫つて來ぬのに郎家屯に退ざき。終に午後四時頃には河を渡つて五里河子迄逃げて仕舞たが。此日敵が野心を逞ましくせずして、開原の我兵力を判断しておとなしく直ちに引きあげてくれたから、さして大なる失態をも生ぜなんだが。若しも此敵が眞面目に戦を繼續して、益々此方面から前進して終に中固開原の通路を遮断して仕舞たる後。更に東方及び北方からツマノフ公爵支隊の主力と、イツノフ大佐とトルベワコイ公爵とが相協力して開原城に迫つたとしたならば、三面に敵を受けて後方との退路を遮断せられたる丸山中佐は如何なる苦戦に陥つたか知れぬ。現に此の日の戦の爲めに安東第十師團長は、丸山中佐にも三岳中佐にも是非開原を失なふなと昨夜豫め命令し

たのであるから。其際本道右方の敵を引き受けよといふ訓令迄あつた三岳中佐は、出来得る限り靱強なる極めて弾性に富んだる戦闘をして、徐ろに退却するの工夫を凝すのが至當であるにも係はらず、頻りに退却するのを能事として他には一切構なく、又もずん／＼と退却したのは甚だ以て其意を得ぬ。此様な行動が戦役中時々騎兵に於て繰り返されたので、戦後に騎兵無用論などが持ちあがることになつたのであつて、此場合の三岳中佐の戦闘振りは失禮ながら評者は同意し兼ねるのである。其上に其兵力の集結に勉めるといふ観念が少なかつたので、益々此方面の戦闘は我が開原守備の爲には不利に／＼と傾いていつたのは、實以て遺憾でもあり事實全く危険千萬でもあつたが。幸にツマノフ公爵閣下がこれも過早に引きあげを決行してくれたので、辛ふじて開原を敵手に委するの恥辱を免れ得たのであつたが、さもなければ此の開原は或は敵手には入つたかも知れぬのであつた。

丸山支隊長は三岳中佐の無闇に退却するのを見て、自己の右側が全く明け

ばなしになるのを深く恐れて、八社西北の寇河北方の小村に不足な豫備隊の中から一小隊を派遣して、横地少佐陣地の右側を掩護警戒せしめんとしたが。もう其時は其村落は既に敵が占領して仕舞たので、此小隊は教場東南の塹壕に據つて直接馬家屯の第九中隊の右側を掩護した。それと同時に三岳中佐の早退を憤慨したる丸山中佐は、勉めて強硬に抵抗して敵の前進を喰ひ止める様に同中佐に向て希望した。丸山中佐の抗議的希望があつたけれどもそれでも我慢が出来ずして、又々清河を飛び越して五里河子へ迄退ぞいたので。此方面から敵が深く侵入しては容易ならずと心配したる丸山中佐は、正面からも北方からも頗ぶる大兵力が前進して来て、今や非常に苦しい場合であつたに關せず。此の退却に退却を重ねる三岳中佐を引き止める爲めに、城北西方に布陣して兩方面の敵と對戦して居た砲兵大隊の第二中隊を割きて、之を急行開原東門外天齊廟南方に移し。三岳中佐の方面の殆んど敵の側面を左方から猛烈に砲撃せしめたので、流石の敵も此砲撃に辟易して其追撃を止めた

丸山中佐の希望は、三岳中佐の方面の殆んど敵の側面を左方から猛烈に砲撃せしめたので、流石の敵も此砲撃に辟易して其追撃を止めた

のであつたが。それが二十三日の午後六時前後であつて、恰かもこれを動機としたるが如く、敵は何れの方面も退却に就き始めたので、味方は漸くほつと一息つくことを得たのであつた。

此時に於ける此敵の來襲は我軍に於ては其真意を知るに苦しんで、或はこれを我軍の配備を偵察せんとするものとし、或はこれを以て開原を占領して將來の運動に利益せんとするものとして、甲論乙駁真意を知るに苦しんだのであつた。であるから安東第十師團長は威遠堡門をも恢復せよ、萬已むを得ずとも開原を棄てるなと命令したのであつたが、何分にも敵に比しては非常に劣勢なる丸山支隊と三岳獨立騎兵とは、廣大なる地域を少數の歩騎兵を以て敵に見せぬ様に巧に邪魔をしたる上に、開原をも堅く守つて彼れに渡すまいといふのであるから、其戦闘には頗ぶる心を勞したけれども。幸にも彼の目的が我軍配備の偵察にあつた爲めに、首尾よく開原を安全に守りをほせ得たのであるが。若しも此時敵が眞面目に開原を攻略するの目的を有して居つ

たとしたならば、二十三日の午前に於ける様な我軍の配備では、到底此地を永く防守することは不可能であつた。其後増援隊到着の後と雖ども兵力には非常の懸隔があるのであるから、開原は實に風前の燈火と一般であつたのであるが。敵がさまでに此開原に執著せずして、何人がいひふらしたのか知れぬけれども事實に於ては有りもせぬ、日本騎兵五中隊と砲四門が開原城に來援したといふ報告が、御殿様のツマノフ公爵に達したので同少將はこゝに日本軍の兵力を、歩兵六、七大隊、騎兵六、七中隊、山砲二中隊と判斷し。我任務了れりといふ考へでさつさと威遠堡門さして退却することにして仕舞たので、丸山中佐も三岳中佐も蔭を以てやつとのこと其責任を盡し得たのであつたが。此敵の來襲には我軍中では非常に驚慌を起して、野津第四軍司令官は第十師團を中固に進め、中固に從來居た前田支隊を開原に進めて開原の包圍を救はんとして、此二十三日夜に其命令を下したのであつたが。此命令を受けた安東貞美師團長は、即夜直ちに全師團を中固附近に移す計畫を決定すると

共に、前田支隊を此夜々半を以て開原に向つて急行赴援さしたのであつたが、これ程迄に我軍に於て驚慌を起させたる此の敵の來襲も、始めは脱兎の如く終りは處女の如しで、敵は此の夜の中に威遠堡門以北に退却して、前田支隊の翌朝到着した時分には最早其影をも見せなんだとは、餘りにあつけない様な感じがせんでもないが。併し一時第四軍の騷動は實に容易ならぬものであつて、二十三日の朝頃は敵が眞面目に攻勢に移轉したのではあるまいかと、當時鐵嶺附近に居た自分評者などは非常に心配したもので。二十二日夜鐵嶺に著した赴任途中の故岡崎中將などは此敵襲の爲め急電に促がされて、夜半出發急行して自分の旅團へかけ附けるといふ程な大騒ぎをしたのである。

露軍に於ては奉天會戦の大敗以來、遠く四平街陣地附近に其兵力を集中して爾後の計畫を整頓し。其間ミシチエンゴ支隊、トルマチエフ支隊を右翼前方に、マスロフ少將の西伯利第三軍團前衛を拘鹿附近に出して、其左翼前を警戒し併せて敵情の不明なるを醫せんとし。更にレンネンキャンプ支隊を遠く東

方海龍城から北山城子方向に、マトリッド支隊を海龍城―通化道上の小城子附近に出して。敗退の爲め全く敵情不明病にかゝれるを大に遺憾として、百方手術を盡して療治をして見たが、思ふ半分も其効能が顯はれて來ぬので非常に閉口して居たのであつたが。二度の勤めで中途から歸つて來た露の新第一軍司令官クロボトキン大將は、深く此の從來の騎兵各支隊の搜索が、常に頗ぶる不充分であるのを以ての外に憤慨して。大舉彼等を十二分に思ひ切つて南進させて、以て敵情を明瞭ならしむるが何より最も緊急なる事柄であると確信して。左の如き計畫を立て、各隊同時に日軍に近迫して、敵が如何にしても其配備を隠すことの出來ぬ様にさせ様と、苦心慘澹其計畫に憂き身をやつしたのであつた。

一、四月中旬に於て西伯利第一、第二、第三、第四軍團より各有力なる支隊を出して同時に開原及び昌圖方面に南進し敵情搜索を援助せしむ

二、第三軍團の前衛マスロフ少將、レンネンキャンプ中將及びマトリッド大佐

の各支隊は、前述の各支隊と相應じて同時に自己の搜索すべき地方に動作し日本軍の配置を充分に搜索するを勉む

三、各軍團より派遣する支隊には四月二十三日を期して開原及び昌圖附近を攻撃せしむる豫定

以上の如き計畫を以て第一軍司令官クロバトキン大將が命令を下したので、今まで何等の機能をあげ得ざりし各騎兵支隊は、其不面目を挽回するのは此時であると意氣込んで其準備に著手し。又同軍内の各軍團に於ては直ちに援助に派遣する支隊を編成して、四月二十一日には何れも其運動に著手せしめたのであつたが。最左翼に位置せる西伯利第三軍團は左の如き支隊を編成して、吉林街道を開原に向つて前進せしむる爲めに、四月二十一日夕楊木林子及小孤榆樹に位置せしめた。

支隊長

西伯利哥騎兵師團第二旅團長公爵ツマノフ少將

東狙兵第九及第十聯隊並ニ之ニ屬スル徒步乘馬各獵兵隊

西伯利哥騎兵第五聯隊ノ四中隊

同第八聯隊ノ五中隊

東狙砲兵第三旅團第三中隊ノ砲四門

合計

歩兵二聯隊、獵兵四隊、騎兵九中隊、砲四門

西伯利第一軍團に於ても同日を以て左の支隊を、吉林街道と鐵道との殆んど中間に位する上石虎子に集合せしめたのであるが、其目的は矢張開原に向ふのであつた。

支隊長

東狙兵第二聯隊長イワノフ大佐

東狙兵第二聯隊第一、第二大隊及乘馬獵兵隊

沿海龍騎兵聯隊第三、第四、第六中隊

西伯利山砲兵第十一中隊ノ一小隊

合計

歩兵二大隊獵兵一隊、騎兵三中隊、山砲二門

又西伯利第二軍團からは左の支隊を出して、同日前同様に上石虎子に集合して、二十二日には横道河子に宿泊するの豫定で前進せしめたが、其編成は左の如くであつた。

支隊長

西伯利哥騎兵第七聯隊長公爵トルベツコイ大佐

東狙兵第十八聯隊第二、第三大隊

東狙兵第五師團ノ全獵兵隊

西伯利哥騎兵第七聯隊第一、第二、第五、第六中隊

東部西伯利山砲兵第十中隊ノ一小隊

合計

歩兵二大隊、獵兵若干、騎兵四中隊、山砲二門

以上の三支隊は何れも四月二十一日を以て小孤榆樹と上石虎子に集合して三道を取つて東北及び北方から開原に向ひ、二十三日を期して猛烈に開原を包圍攻撃して此方面の日軍配備を、何としてなりとも曝露せしめんと必死になつて計畫したのであつて、三支隊の兵力を合すれば歩兵約十大隊、騎兵約十六中隊、山砲四門、野砲四門計八門の外に、稍、其隊数は不明であるが露兵の精銳とも稱すべき乗馬獵兵七隊と徒歩獵兵六隊といふ大兵力であつて、これが二十二日には開原を包圍し様といふ手筈であつたのであるが、日軍に於ては二十三日の朝までは全くそれ知らなないのであつて、實に危険千萬なることであつたのであるが、今から此の露軍の各支隊がこれから如何に運動したかに就て聊か研究の歩を進めることにし様。

ツマンノフ公爵は前述の支隊を率ゐて楊木林子、小孤榆樹に二十一日の夜は宿營して、其獵兵隊を前進さして孤榆樹と蓮花街とを占領して、以て明日の前

進に支障なき様準備したが。四月二十二日になると日軍歩騎兵が南城子に居ることが知れて居るので、充分に仕度を整頓して前進せねばならぬ。そこで騎兵第八聯隊の二中隊を孤榆樹から左方に分進せしめて、それをマスコフ支隊の騎兵の居る豫定である神樹堡に向はしめて、左翼友軍と連絡を確實にするを勉めて。さて前進搜索隊として今神樹堡へ派遣した残餘の騎兵三中隊を、同聯隊長伯爵ステンボフ大佐に指揮せしめて午前五時に出發せしめ。更に騎兵第五聯隊の三中隊を以て支隊の直接警戒に任じて、午前五時十五分に前進を起さしめて、其後方から支隊本隊は三縦隊となりて前進したが。其中央縦隊は歩兵一大隊と砲四門からなりてこれは吉林街道を進み、右縦隊は歩兵二中隊、徒歩獵兵二隊、乘馬獵兵一隊であつて本道の右方から進み、左縦隊は歩兵一大隊であつたが以上は何れも東狙兵第十聯隊の歩兵のみで。東狙兵第九聯隊の二大隊は中央縦隊の後方から豫備として續行したのであつて、此の前進の方法は頗ぶる複雑なるやり方ではあるが、先づ露軍としてはこれを適當と

いふべきであらふ。但し評者がツマノフ公爵であつたとしたならば、實は此様なやり方はせぬつもりである、即ち騎兵は同少將の使用したる如くにして。さて歩兵二大隊と獵兵二隊を以て前衛とし更に歩兵一、二中隊、獵兵一隊を右側衛として、其他を悉く本隊として本道を進ましめ、左方沿道の山地には他の獵兵一隊を以て警戒せしめて前進する考である。勿論敵の如何なるものが何れに居るか、不明であるから、用心堅固にして進むがよいのは知れて居るが、まだ此場合南城子に少數の日本の歩騎兵が居るといふことを知つたばかりであるから。三縦隊の配備をして前進するといふのは餘りに變てこなるやり方であつて、實際此場合の情況に合して居らぬ稍、穩かならぬ部署であると評者は思ふ。此の配備を以て前進して南城子の日軍搜索隊を撃退したが、まだ左方マスコフ支隊に連絡に出した騎兵二中隊から何の報告も來ないので。寇河々谷に沿ふて吉林街道を開原に向つて進むに當つて、此の支隊の背後を安全ならしめんとして、南城子北方の各高地を占領しあらしむる爲めに、こゝに歩兵第

九聯隊の一大隊を残置することにしたが。評者はこれは餘りに石橋兩杖的であると思ふ。いふ迄もなく兵力があり餘つて居るなれば、全道路の至る所に遞騎哨の如く收容歩兵を配置するのも一案であらふが。此場合には敵の位置も兵力もまだ極めて不明確であつて、可成多くの兵力を手中に握つて前進するの必要がある。左すれば背後の杞憂の爲めに少數なる監視の兵でも残すなればまだしも、一戦闘單位を徒らにこゝに残して前進するといふのは、無益に兵力を分割するものであつて評者は不同意を唱へざるを得ぬのである。既に今朝騎兵二中隊を連絡の爲めに神樹堡に出してある以上は、それに信頼して此方面の懸念を餘りに深くせずして、其今後の動作に必要な歩兵を纏めて前進するが至當であつて、此際ツマノフ公爵は餘りに用心深かきに失したと思ふのは評者のみではあるまい。

更にまた此の南城子から歩兵一中隊、騎兵一中隊を神樹堡に派遣して、マスロフ支隊との連絡をとることを命じたが。これも全く無益ではないが餘りに兵

力を重複して同一の仕事に使用するといふ謗りを免れぬものであると思ふ。若し出すなれば騎兵の將校斥候の一つも出せば充分であると評者は思ふ。一體此の公爵閣下は多分大なる素封の名家であらふから、思ふに其金づかいも奇麗で立派であらふと信ずるが。其筆法を以て多からざる兵力を濫費してくれば、折角の目的地に達する時分には兵力がなくなつて仕舞ふことになる。氣前のよいのは何事にも悪いものではないけれども、兵力を金錢通りに貴族的に湯水の如くふりまかれては忽ちにして戦闘が出来なくなる、で評者は此の連絡も餘りに大袈裟に過ぎて居ると思ふのである。

其後ツマノフ支隊は日軍の退却に尾して前進して、二道河子を距る、約三千米突の南城子南方高地に達したる時、二道河子東方高地に據れる日本軍歩兵の射撃を受けた、これが二十二日の正午前後のことであつたのである。そこで三縦隊は何れも此の日本歩騎兵を三方面から包圍する様にして前進して、左したる激戦を交ふることなく漸次に南進を繼續して、此日午後四時前後に

威遠堡門を占領したが。四家子東方高地にはまだ日軍が據つて居るので、砲兵を威遠堡門に進めて此所から猛烈に砲撃して、此の日本軍をも撃退して四家子から大塔子に亘る東方高地脈を占領して。此夜四家子から威遠堡門の間に宿泊したのであつたが。歩兵三中隊、騎兵五中隊しか持たなんだ三岳中佐に對して、混成旅團の實力を有するツマノフ支隊が、僅かにこれを四家子西南に撃退したばかりで、何の得る所もなかつたのは少しく物足らぬ感じがするのは、何人も同感であらふと思ふが併しこれは餘りに此支隊ばかりも責める譯にはゆかぬのである。即ちそれは他の軍團から援助に出かけた兩支隊と相協力して、開原を攻撃するといふ最初からの豫定であつたのであるから。他に關係せず獨力で勝手に前進することが出来ず、それを待ち合せる爲めに斯く緩漫になつたのであつたが。最も大なる兵力を有し且つ其階級からいふても此支隊長が一番上官であるからは、他の支隊も左して遠方に隔だたつて居る次第でもないから。よく／＼それ等と交渉して巧にこれを指導して、今少

し其前進を速ならしめたならば、此日此の三支隊を以て南羊鋪趙家臺開原站到亘る線まで進出するのは容易であつたらふ。否々少しツマノフ少將が奮發すれば、他の兩支隊の力を借らずしても前述の位置を占められたに相違ないのであつた。左すれば翌二十三日の爲めに敵情の偵察も充分に出来た上に、翌拂曉を以て開原城に迫ることが極めて容易であつたらふに、惜しむべし、此支隊が頗ぶる悠長にかまへて早く停止して仕舞つたのは、如何にも遺憾千萬であつたと評者は思ふ。

西伯利第一軍團から派遣したるイワノフ大佐支隊は、歩兵二大隊、乘馬獵兵一隊、山砲二門、工兵半中隊の外に、第二軍司令部から派遣されたる伯爵ウエレボリスキー中尉の集成中隊を合して、四月二十一日に上石虎子に集合して。アフナシエフ大佐に騎兵三中隊、獵兵一隊を指揮せしめて、南城子西北約一里の東鵝溝まで南進して、こゝで二十一日の夜を明かしたが此日は別に敵と遭遇せず仕舞であつたが。ツマノフ少將とも近く相隣つて居りながら、此夜

は更に相連絡するに至らなんだ様であつた。此の兩支隊の如きは明日共に開原を攻撃する目的であるから、互に澤山な騎兵をも持つことであれば、速に相連絡してよく打合せをする必要があるのに、それに注意を拂はなんだのはこれはイワノフ大佐の失念である。ツマノフ公爵とても同様である。であるから翌日午後に至つて始めて連絡するといふ様な不手際なことになつて仕舞て、遂に二十二日の戦闘が極めて不活潑極まる結果に終つて仕舞つたのであつた。

西伯利第二軍團から出たトルベッコイ公爵支隊は、前支隊と同一地點に二十一日に集合して、道を西南にとつて前進したが此隊も敵と相會することなく無事に前進して、二十一日の夜は何れに明したか知れぬが、昌圖停車場の東方二里餘の横道河子に二十二日に一泊して、更に南進して北方より開原を攻撃せんと準備して居たが。此隊とイワノフ支隊との間に前夜も此夜も連絡があつた模様は少しもないのであつて、斯く共同の目的に向つて進みつゝあ

る各隊の間に、交通連絡が不充分では到底面白い戦闘が出来るものではないのである。

イワノフ支隊は二十二日ツマノフ支隊が近く吉林街道にあるを知つて、午前東鵝溝を出發して道を双城子、後馬市堡に取り、日軍騎兵斥候を撃攘しつつ、前進して大獅子溝の北方に到着し、午後五、六時頃其兩側の高地を歩兵を以て占領し。更にアフナシエフ大佐の騎兵三中隊と乘馬獵兵隊とを以て、後馬市堡から留蓋菜勾に互る高地を占領して、近く開原站北方高地の日本軍と相對峙して夜に入り。此二十二日の午後には於て始めてツマノフ支隊と連絡したのであつたが。又トルベッコイ公爵支隊は前述の如く二十一日何れに宿泊したか知れぬが、此夜も遠く北方なる横道河子に宿營した爲めに、前述兩支隊との連絡は出来なんだものらしいのであつて、此の支隊の到着を待つ爲めに翌二十三日の攻撃が非常に遅くなつたものらしい。一體このトルベッコイ公爵はイワノフ支隊と同地に集合して出發したのであるから、理窟からいへば

此様に遅参する筈はないのであるが。昌圖停車場方面に向ふたる西伯利第四軍團の援助支隊との關係で、思ふに此様に他の兩支隊より後退して宿泊するの已むを得ざることになつたものであらふが。去るにても横道河子から威遠堡門へは、約略四里内外の距離であつて良道が通じて居るのであるから。此の二十二日の夜に於てはそれと連絡するの必要があつたのに、何等それ等に頓著せなんだのは評者は頗ぶる不同意であつて。斯く各個各別になる様な結果に至つたのも、要するに最初軍司令官が各軍團から支隊を出す場合に、其打合せが不充分であつたのが抑、の原因をなしたものであらふから。強がら此の支隊長達のみを責むべきではないかも知れぬが、去りとして特に此の支隊の後れたのは如何にも不審に思はれてならぬのである。

二十二日の夜は前にも述べた通りツマノフ、イワノフ兩支隊は近く相連絡して、後馬市堡から四家子の線に陣地を占めて、其司令部も三千米突足らずの威遠堡門と大獅子溝に宿泊したので、極めて好都合に此の兩支隊の明日に對

する交渉は出来たのであつたが。約四里餘も北方に後退して居たトルベッコ
1 大佐支隊が、明日此の兩支隊と共に開原を攻撃するといふ筈であるから、それが何とか消息を通ずる迄は餘りに戦闘を進める譯にゆかぬので、明拂曉に乗じて開原城下に逼迫するといふことは不可能であつた。そこで兩支隊は充分に此夜に於て準備萬端整頓して、翌二十三日にトルベッコイ公爵の何時に此方面に進出するかを確かめて、それから前進を起すことに仕様としたものであらふ。そこで此夜はこゝに停止して充分の休憩をとつたのであつたが、兩隊ともに不思議にも翌朝九時半頃までは何の爲す所もなかつたのは、他を待ち合せたといふものゝ如何にも油斷千萬であつたと評者は思ふ。

四月二十三日ツマノフ少將は其歩兵を前馬市堡—中固街道と前馬市堡—開原街道の兩道に進めて、日本軍を撃退しつゝ、開原城下に迫り、本道南方靠山屯、羊馬大屯方面は騎兵を以て之を偵察警戒せしめて。其右翼にありしイワノフ支隊をして、趙家台方面から日本軍の左翼を攻撃せしむる手筈にしたが、何分

にも最一つのトルベッコイ公爵支隊が来る筈であるのに、それをさし置いて戦闘を開始するのも穩でないと考えて、此日の午前九時半頃までは爲すこともなく過ごしたのであつたが、これは實に不都合千萬であつて。此の露軍の油断中に日軍陣地の塹壕も出来あがるし、又中固及び鐵嶺からの急行増援も到着するといふことになつて、露軍には非常な不利益を持ち來したのである。此の兩支隊が朝寝をしたのはまだ理由がある、即ち最一つの支隊を待つ爲めであつたのであるから、兎に角それだけの理由はあるのであるが。これに反してトルベッコイ公爵は、頗ぶる理由なき朝寝をやつたのは不都合千萬である。此の支隊は他の支隊より殆んど四五里遅れて居る、それに拘はらず二十三日の朝にも午前九時から始めて運動を起して居る。四月下旬であれば午前五時少し過ぎには夜が明けるのである、左すれば日出後に於て起床して總ての準備を整頓しても、午前七時には餘りに早起をせんでも出發は出来る筈である。然るに此の支隊は此日午前九時に横道河子を出發して居る、かゝる

寢坊には精力主義な軍の神が決して幸運を與ふる筈がないのである。左なきだに他に遅れたる此支隊が午前九時に出發したのであるから、頗ぶる遅れて午後一時三十分に全部が趙家台に到着して、こゝに又々敵前で大休止をしたのであるから呆れざるを得ぬ。露軍の貴族などといふものは何所まで暢氣なものであらふか、實に其程度が我々の物さしでは測量が出来ぬと評者は思ふ。三個の支隊は二十三日の午後に於て兎に角戰場に到着したので、こゝで相協力して開原を攻撃するの部署が一決して、ツマノフ少將は其主力を以て三家子及び九社の方向より開原を攻撃し、又た其一部を以て日軍獨立騎兵の方に進ましめ、イワノフ大佐は後馬市堡から趙家台に出で、此の方面から北地方向に向つて攻撃し、トルベッコイ大佐支隊は趙家台から轉進して、羊鋪方向から開原城の北門方向に向つて攻撃することになつて、愈々各支隊が何れも本氣に攻撃を開始したのは當日午後三時前後からのことであつた。斯くて頗ぶる緩慢なる攻撃をして居る中に、日本軍には此日午前

援隊が加はつたので、聊かも此様な半熟的な戦闘をする連合軍には恐ろしがる模様なく、唯だ最左翼に居た一部隊則ち三岳中佐が矢鱈と退却した外は、何れも泰然と構へて容易に退却の模様を見せぬ。其内に時間はだん／＼経過して來て午後六時近くになると、ツマノフ公爵は日本軍騎兵五中隊、砲四門が南方から開原に來援したとの報告を得たが。是れは何かの誤報であつたに相違なく、其頃來援隊は到着したことはないのであるが、それを確實なる情報と信じたるツマノフ少將は、開原の日軍兵力を歩兵六、七大隊、騎兵六、七中隊、山砲二中隊と判断し。開原の兵力を斯く判断し得たのを以て自己の任務を終りとして、直ちに威遠堡門に退却するの命令を下して、夜に入るを待つて百餘の傷者を收容しつゝ、一度び威遠堡門の南方に集合し。更に夜を徹して孤楡樹に向つて退却したが、此公爵の退却時機は頗ぶる評者には不審でならぬ點がある。

開原に在る日軍の兵力を知る爲めならば、何もこれ程な大騒動をやらんで

も偵察の出來ぬことはない。又それならば何も他の兩支隊を待ち合わせる必要もない、獨力でそれ位のことは容易に出来る筈である。然るに兩支隊の來著を待ち合せて殆んど開原を包圍せんとしたのであるから、評者などは多分開原城を占領して一時これを根據として、此方面の敵情搜索隊の前進據點とするのであらふと思ふて居たのに。其全支隊を展開して戦闘したのはツマノフ支隊ばかりで、他の兩支隊はまだ眞實の戦闘を開始するに至らぬ、ほんの初戦の間に本尊様のツマノフ公爵は打方止めをやつて仕舞つたのは實に何の爲めであるか。よしや騎兵の五中隊や砲四門位が開原に加はつたとしても、左して狼狽して退却する程危険なことではないではないか。各支隊が眞面目に攻撃をして敵を三面から猛射したならば、城外に位置した日軍は到底久しく其線を保つことは出來まい。況んやイツノフ大佐もトルベッコイ公爵も、何れも山砲二門づゝを持つて居るのであるから。此の兩砲兵が協力して羊鋪方向から馬家屯、北地、南羊鋪、南方高地に亘る、日本軍の横地大隊の陣地を眞側面から

側射した場合には、忽ちにして此の日軍の防禦線は維持困難になるのは目前である。然るに此の方面の兩支隊が僅かに戦闘を進めた時に、最早退却に決心して其通報を發したのは如何にもつまらぬことをしたもので、これ位のことをするつもりならば、何の雜作もへちまもあつたものでない。昨日の午後になん少しく日軍の退却を急追して見さへすれば、それこそこの場合よりもまだよく日軍の内情を探り得られたに相違ないのである。今日しかも兩支隊の到着を待つてやる位ならば、日軍に一泡ふかせて開原城に逃げ込ませるか、あはよくばそれを棄て、中固に向つて退却させやつて見たがよいではないか。左すれば其後方から今まで秘匿して居た本ものが、不巳得していや應なしに其救援に諸方から出かけて来るに相違ないから、それで日軍の配備が頗ぶる詳細に偵察し得られる都合ではないか。それを餘りに大事をとり過ぎて開原の兵力を知つたを以て満足して、こゝに此搜索戰の幕をしめる手筈をしたのはいくら考へて見ても遺憾である。これでは到底多謀なる露の第一軍の司令官

の心の中の、騎兵搜索に懽焉たる雲霧を除去することは出来なうであらう。イワノフ大佐は潘家屯と姜家油房を占めて攻撃を始め、トルベッコイ公爵は轉進して羊鋪から攻撃を始めて南進し。日軍横地少佐の大隊の第十一、第十二中隊の陣地の一部を奪略して、正に此南羊鋪南方高地を占領し、更に開原城に向はんと意氣込んで居た午後六時頃。西伯利第四軍團から昌圖停車場の方に出したる、同一任務を有する支隊の連絡將校がやつて来て、其隣接支隊は午後五時五分退却を開始するといふ通報を傳へたので此トルベッコイ支隊も爲めに少しく逡巡して、餘りに敵に迫らずして聊か思案をしたのであつた。それが爲めに殆んど危険に瀕したる日軍第十一、第十二の兩中隊は、幸にも此の高地を守りをほせることを得たが。其内にツマノフ公爵からも今夜威遠堡門以北に退却するといふて来たので、こゝに此の支隊も直ちに退却に決心して午後七時四十分イワノフ、ツマノフ兩支隊の退却を確かめたる上。今朝の朝寢で少しも眠むくなかつたと見へて、夜を徹して退却を執行して此夜西沙河

子迄退ぞいて宿營したのは、たしか二十四日の午前零時頃であつたのである。又イワノフ支隊も夜に入るを待ち、左右兩支隊と同じく退却して此夜の中に横道河子にまで退ぞいたが、それは二十四日の午前五時頃であつたとのこと。第一軍司令官クロバトキン將軍の從來の騎兵搜索を齒痒ゆしとして行ふた、頗ぶる大規模なる各軍團の各支隊の同時に決行したる敵情偵察も、開原方面に於ては其城内に居る日軍の兵力を頗ぶる不確實に知り得た位で、外に何等の得る所なく終つたのは如何にも残念千萬であつたが。併し此の露軍の來襲には日軍の此方面に位置せる、第四軍は非常に驚かされたものであつて鐵嶺から中固附近は二十二日、二十三日は爲めに隨分と雜沓したものであるが。若し此の三支隊が今少し冒險的の勇氣を出して、開原城を包圍したる餘力を以て深く南方まで侵入して見たならば、まだく澤山に獲物を得ることが出來て、少しは露軍の第一軍司令官にも笑顔をさせることが出來たであらうに。餘りといへば此の三支隊長が謙徳に富んで居た爲めに、終に聊かも第一軍司

令官に苦蟲面を直させ得なんだのは、全く以て氣の毒千萬であつたと思ふ。それも其筈かも知れぬ此戰に關係したる人々には、不思議にも彼我兩軍ともに貴族の多いことであつて、偶然とはいへこれ程よくも貴族ばかりが集まつたものと呆れるのは、西伯利第三軍團から出た支隊長が公爵ツマノフ少將で、其部下には伯爵ステンポフ大佐があり。第一軍團から出た支隊には第二軍司令部派遣の集成中隊長伯爵ウエレボリスキー中尉があり。又第二軍團から來た支隊長は公爵トルベッコイ大佐である。露國軍人には貴族が澤山なのは知つて居るが、此様に公爵や伯爵で目をつく様なことは珍らしいと評者は思ふ。更に極々華族の少ない日本軍人の中で、御つきあいに此公伯爵のお相手にまかり出たのが、誰れであるかといへば衣紋古實の家柄たる、子爵高倉永則現大佐であつたのであるから實に不思議千萬である。それであるから朝寢をしたり敵前近く大休止をしたり、戦闘が總てに亘つて緩漫であつて悠長千萬であつたのも其所であつて、兩軍ともに謙徳に富んだ人物が多かつたのも道理

千萬であるかも知れぬ。加ふるに確實ではないが三岳中佐の山の神は、故男爵楠本正隆翁の令嬢であるとか聞いた様であるが、左すれば例の過早退却も貴族的戦闘で愈、以て面白いではないか。そこで評者は此の一戦を新にこゝに命名して、開原及び威遠堡門附近に於ける日露兩軍の貴族戦と改題するが至當であると考へるのである、讀者諸君それ之を如何となす。妄言駄洒落多罪々々。

大正五年六月九日印刷
大正五年六月十二日發行

〔戰史評論與附〕



著者

無名戰士

東京市麴町區平河町四丁目十一番地

發行者

宮本林治

東京市赤坂區田町五丁目十一番地

印刷者

山田三次郎

發行所

東京市麴町區
平河町四丁目

宮本武林堂

電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番



戰史評論

大正五年六月（露軍騎兵大集團法庫門附近來襲 上）

宮本武林堂發行

大正
5. 7. 3
内交

戰史評論

無名戰士評
成仁武夫補

第三十五回 露軍騎兵大集團の法庫門附近來襲 上

奉天會戰の後頗ぶる慎重に大事をとつて永陵街附近より鐵嶺を経て法庫門に亘る線に停止して、大に兵力を補充すると共に英氣を養つて居た日本滿洲軍は。其極めて少數なる騎兵と頗ぶる多くの間諜とを巧に利用して敵情を探り、將來の攻撃前進の爲めには今少しく第一線を前進せしめて、右翼英額城附近より威遠堡門、昌圖を経て左翼康平に至る線を占領するを必要なりとし、各軍は五月三日より其前進運動を開始したのであつたが。乃木將軍の指揮する我が第三軍に於ては、法庫門を中心として金家屯康平の線以南に其軍を集

中せんとし、其後方補給線としては遼河の水路と奉天—法庫門道とを使用し。石佛寺に於て遼河に大軍橋を架したる上、三面船と大孤家子に最左翼の兵站司令部を開設して、軍を新占領線に移す爲めに必死に努力して居たのであつた。

我が此の左翼軍たる乃木大將と相對して居たる露軍の大將は誰れであつたかといふと、それは露の第二軍司令官カウリパルス大將であつたが。彼は奉天大敗の後に於て二十四大隊といふ非常に莫大なる兵力の補充を得たにかゝらず、此の五月の中旬から六月上旬にかけて更に此軍に到着すべき豫定になつて居る、頗ぶる優勢なる所の大兵力を其軍中に加へたる後、我軍と戦を交ゆる様にせねば不利であると考へて。頻りに増援の急送をせき立てると共に一方に於ては、何とかして我滿洲軍のそれ迄に活動せざらんことを、必死になつて神に祈つて居たのであつたが悲しいかな全く其甲斐なくして、五月上旬から日軍は全線に亘つて運動を開始したので、すはや攻勢移轉とばかり敵

の狼狽は實に一方ならぬものがあつたのであるが。就中此の第二軍司令官カウリパルス大將は、前述の乃木第三軍の轉位の運動を以て全く正眞の攻勢移轉と確信して、又此の勇猛無双の大將が例の奉天會戦の時と同じく、自己軍の右翼を迂回し始めたと思つたからたまらぬ、居ても立つても居られぬ程な大心配。思案に餘つて一計を案じ出して左翼の警戒に任じて居たミシチエンゴ將軍を呼び付けて、此の將軍に騎兵大集團の敵背後に對する大挺進を命じたのであつたが。同將軍は營口に於ける此年一月の大挺進で實は少なからず味増をつけたる而已か、其挺進が無駄骨折であつて頗ぶる理窟にかなはざることを後に至つて氣著いて後悔して居たものであるから、此注文に對しても二つ返事で委細承知と應じてくれない。卒直にして忌憚する所なき同將軍は左の如き諫止的の言を以て第二軍司令官の要求に答へたのである。其答辯は戦理に合したるもので實に痛快を極めて居る要旨に曰く

「若し第二軍にして予の部隊に協同して直に攻勢に移轉せらるゝならば、予

は如何なる危険を冒しても必死予の部隊の挺進を最も有利に指導し、敵に大損害を與ふるに全力を盡すことを辭せず。然れども今閣下のいふが如き予の部隊のみ單獨にて挺進し、敵の背後を擾亂せしめて再び我戦線に歸來するものとせば、それは彼の失敗に終れる營口の前轍を履むものにして極めて我軍に不利である。斯の如くんば予は其挺進たるものゝ必要なる抑の意味を解すること能はず』

剛性ではあるが流石は明敏なる頭腦を持つミシチエング將軍である、其言ふ所一點も無理がないのであつて至極尤である、此の抗議的答辯に出會したるカウリバルス大將も實は大に閉口をしたのであつたが。前に述べたる敵の攻撃前進を延期させる必要が目前に迫つて居るので、その爲めに挺進をするのであるから決して無意味ではないと、懇々現在の彼我の實情を述べて殆んど哀願的に其挺進を切望したので。左までに上官の懇請を却ぞけることも出来ぬ上に、此の挺進が全く無意味でなく敵の攻勢移轉を一時牽制して遅延させる

といふ目的が、兎にも角にも曲りなりにも決定したので溢々ながら承諾をしたのであつたが。カウリバルス大將から最後に中立地帯なる新民應を犯すなといふ訓令を附加せられたので、又々ミシチエング將軍の感情を害して仕舞つて、いらざる義理だてをして騎兵の自由を束縛して仕舞つて何にする、そんな意氣地のない上に融通のきかぬことでは到底立派な大挺進は出来ぬと、同將軍は頗ぶる不満々で此挺進の準備にかゝつたのであつた。

我軍に於ては將來の攻勢移轉の準備の爲めに其位置を前進せしめるので、今直接に何をやるといふ手近かな目的がある譯ではないが。さればとて其軍隊の移動を敵に知られるのは何れにしても不利益であるから、可成それを敵に秘する様に注意をしつゝ實行したのであるが。敏とくも敵はこれに感著いて非常に神経を惱まし出し、彼の第二軍司令官カウリバルス將軍の如きは全くこれを以て正眞の攻勢移轉と確信して、此の非常手段を講じて迄も乃木軍の前進を妨げ様としたのであつたが。一方自分の方にまだそれ程大なる希望

を抱懐して居らなんだ乃木大將は、敵が此の移動を左までに恐怖して居らふとは思はなんだので、随つて敵の騎兵が其爲めに大挺進を企だてるといふ様なことには、毛頭其考を及ぼして居らなんだのは事實であつたが。其前面の敵兵が我前進に氣を著けた模様が見へて、五月十五、六日頃になると遼陽窩棚附近に大なる騎兵の集團が集合したるものゝ如く、それが又從來と異なり大に活動をせんと計畫する模様があるので。此方面の占領に任じたる第七師團の第一線各隊は、聊かも油断することなく此の騎兵大集團の行動に一層注意を集注して居たのであつた。

五月十六日には敵の騎兵が第七師團の前哨線の右翼からまはり込んで、歩兵第二十五聯隊の殆んど背後なる花楊樹の東方までやつて來たが。翌十七日の朝程家坨子附近で我前哨の一下士哨の急射撃を受けて天鵝泡の方から北方へ潰走した。此の警報を得て歩兵第二十五聯隊の警戒を嚴にしたのはいふ迄もなく、其左に隣接して居た故黒澤源三郎少將の指揮せる、歩兵第二十六聯

隊も大に戒愼を加へて。同日午前十時に其第三大隊(第三中隊欠)を前進部隊として急に獅子峪附近に派遣し。山葦子附近一帯の高地に防禦陣地を構成して、其前方に前哨を配布すると共に内部の各隊の配置をも變更して、不時の事變に備へんと準備したが。此日平城少佐の指揮せる騎兵第十五聯隊の二中隊は王家崗子に在つて敵騎に接觸を保ち、寡兵を以て大膽千萬なる搜索を續行した爲めに、午前十一時から正午頃の間は於て、約五、六十中隊を下らざる敵騎兵大集團の、太平街から新發街附近に到着したることを發見して。其旅團長田村久井將軍に大至急の報告を呈すると同時に、其詳細を直接關係ある第七師團長にも時機を遅延せしむることなく敏速に通報した。

此平城盛次少佐の搜索報告は實に大手柄である、敵は非常に優勢なる騎兵を有して其前面に騎幕を設け、三合河、孫家坨子、三家子、新發街といふ線には敵騎充滿して、其背後の運動を秘匿せんと努めて居たに係はらず。此方面約五六里に亘る間の搜索に僅々二中隊の微弱なる騎兵を以て熱心に之に當り、機

を逸せず敵騎兵が大兵力を我が左翼前に集合して、今から何か一謀反企だてんとする準備中にあることを、逸早くも確實に搜索し得て之を其旅團長と、更に最も関係の多い第七師團長に通報したのは、實以て偉大なる御手柄である。其搜索の手腕が正に鮮かたに確かに立派である。十七日の正午に於て此の平城少佐の有益なる報告があつたに係はらず、此敵挺進隊の爲めに散々に背後の一部を擾亂せられたのは、これは確かに第三軍の手ぬかりであつて。時恰かも其移轉運動最中の出来ごとであつたのが、更に一層敵に好機を與へることになつたのであらふが。若し此の平城少佐の適時適切なる通報がなかつたならば、第七師團の如きはまだ幾層倍手ひどい目に出會したかも知れぬのである、これ即ち彼の陣中要務令に所謂

「搜索勤務ハ主トシテ騎兵ノ任スル所ナリ此騎兵ノ任務ハ最モ重要ニシテ其範圍頗ル大ナルヲ以テ一騎卒ト雖モ亦各級ノ指揮官ト均シク拔群ノ功ヲ奏スル機會アリトス而シテ搜索勤務ニ任スル者ハ進退趨捷ニシテ奇計ニ富ミ

戰術ノ理解力ヲ有シ機ヲ察スル鋭敏ニシテ果敢斷行ヲ尙ヒ奮勵シテ非常ノ困厄ニ耐フルヲ要ス」

と述べある如く頗ぶる重大なる任務であるが、此場合平城少佐は其寡少なる兵力を以て廣大なる正面の搜索を擔任して、機敏に敵騎の行動の確實なる情報を偵知して、これを後方諸隊に報告通報して其來襲に應ずるの準備を促したのには、實に最も適當なる處置であつて。聊も間然する所なく前に掲げた陣中要務令第六十七の明文に該當する資格を具備したる人といふべきであつて、其報告が第三軍に非常な警告となつたのはいふ迄もないことであつた。敵の騎兵は更に進んで三義好東方の王家平房に現れ、更に鐵家窩棚に進んで黒澤聯隊の第九中隊の前哨と射撃を交換し。又康平北方の白家窩棚に居た白石騎兵大佐指揮下の、騎兵第一聯隊第三中隊へも敵の騎兵の小部隊が迫つたが、同中隊がこれを撃退すると其後方から優勢なる集團が續々前進して來て、其前衛中隊とも覺しきものが下馬して白家窩棚の攻撃を始めたので。第

三中隊は白家窩棚の圍壁に據つて暫く之を防いで見たが、敵は漸次に其兵力を増加して其東方李家窩棚の方から、蘭州街の方まで進入して此中隊を包圍せんず有様となつて來たので。小恒道子に出て居た歩兵第二十七聯隊第五中隊の小哨の收容を受けつゝ、拉々街小郷約窩棚を経て小恒道子へ辛くも退却したが。其退却が殘念ながら機を失したる爲めに、途中で此の騎兵中隊の大行李は大損害を受けたのであつたが、これは十七日の午後三時前後のことであつて、それから敵は更に獐子洞の方へ向つて前進したのであつた。

前の平城少佐の騎兵の頗ぶる偉勳を奏したるに反して、此の本月の十五日以來拉々街に出て居て、更に昨十六日白家窩棚まで進んだ騎兵第七聯隊長白石大佐に屬せる、騎兵第一聯隊の第三中隊は頗ぶる不手際千萬なことをやつてのけたといふのは。敵騎が近接し活動すればこそ十五日以來此方面に搜索に出たのであつて、注意して少しく遠く前方に多くの斥候等を出して敵の有様を偵察して居たならば、何も此様な不體裁なる退却をやる様な不覺をとる

ことはない筈である。白家窩棚から新發街までは僅々一里内外で、太平街までも二里には遠くない位の近距離であるから、此附近まで斥候を進めて油斷なく敵と觸接を保つて居たならば。平城少佐が敵騎五六十中隊の太平街附近へ集合したのを知つた頃には、此の中隊長も矢張これと同様な敵情を得ねばならぬ筈である。よしや若しも五六十中隊とまで明確でなくとも、我より遙に優勢なる敵騎兵大集團の進來を、此日の正午頃までにほのかにでも知つて居たならば、大行李を敵に奪はれて焼夷される様な不始末には陥らなんだ筈である。況んや一里半の後方には小恒道子の歩兵の小哨があり、又其後方約半里の大恒道子には歩兵第二十七聯隊の、前哨第五中隊が居るのであるから。速に足手まといの大行李をそこまで退却させて置き、さて其後に白家窩棚の村端の圍壁に據つて充分に敵を喰ひ止めて、其敵騎の兵力編合と其企圖とを偵察して程よい所で退却すれば、先づノノ以て無難なる動作をしたと評することが出來様と思ふ。然るに騎兵第十五聯隊の第二、第三中隊を率ゆる平

城少佐は、約略敵の兵力の真近敷を偵察して逸早く報告や通報を發するといふ手柄をやつて居るのに、殆んどそれと同一なる關係の位置に居た此の中隊長が、何等我軍に有益なる報告を送らぬのみか、自己の退却の機を失なつて大行李を敵に取り押へられるといふ様なる、大失態を演出したのは甚だ遺憾千萬であつて。これ實に其中隊長がまだ弱年で戦争の實地に慣れて居らぬのが原因ではあらふが、併ながら要するにこれ油断である懈怠である。大倦怠である。若し少しく此の兩三日來の前面の状況に心を潛めて考へて見たなれば、何としても此様な孤立挺出したる一小村落で、敵が其村を包圍するに至るまで大行李をも退却させずに居られる筈がないのであつて。奉天會戰以來敵の行動の極めて遲鈍であつたのに慣れたる此隊は、なに又例の搜索隊がやつて來た位のもので、大したことはないとばかり高をくゞつてすまして居たものであるから。大切なる大敵の進來をも早く知ることが出來なんだ上に、終には其勝手許まで敵から荒らされて内兜を見透かされるの不體裁を演じた

ものであつて。いつとても戦争には油断は大敵であるけれども、就中騎兵が遠く孤立前進して搜索勤務に服する様な場合の如きは、殆んど不食不眠でやるといふ程に熱心な覺悟でこれに當らねば、其目的を達せられぬ而已か却て敵に其隙に乗ぜられるものである。からして前に引用したる陣中要務令の條文の末にも、『奮勵シテ非常ノ困厄ニ耐フルヲ要ス』と明白に警告を與へて居るのである。

敵の騎兵が其前哨第五中隊に衝突したるを知りし歩兵第二十七聯隊第二大隊長宇宿格輔少佐は、其第六中隊を朝陽堡に第八第七中隊を藍家店に於て、何れも豫て準備したる陣地に就かしめて此敵に備へ。其聯隊長たる竹迫彌彦中佐現少將は、第三大隊を大傳窩棚の防禦陣地の後方に、第一大隊を道藍套海に速に集合せしめたのであつたが。此の聯大隊長の處置は何れも評者の大に同意する所である。

然るに敵は更にそれより西方に轉進せんとした。其方面に位置したのは歩

兵第二十八聯隊であつて、其聯隊長は老功なる奥田正忠大佐であつたが、右方山蔵子から拉々街の方面で銃聲が頻りに響いたと思ふて居ると、十七日の午後三時頃敵の騎兵約一千大恒道子北方に現るといふ報告に接した。いざや敵こそ御参なれ目に物見せんとはかり、勇みに勇んで直ちに其第一大隊の第一、第四中隊を、大隊長長谷川少佐に指揮せしめて趙家窩棚と龍王廟子の陣地に在らしめ、第二、第三中隊を馬連屯に集合せしめて自分手許の豫備として。更に加島五郎大尉(現中佐)の第二大隊を王連窩棚の陣地に就かしめ、第三大隊は旅團の豫備として依然康平に置いたのであつたが、後に敵の陳家窩棚附近から本道にかけて約二聯隊程停止したといふ報を得て、加島大尉の大隊から第五、第七中隊を王連窩棚に残してこれを長谷川少佐の指揮に屬し、第六、第八中隊を加島大隊長と共に自己の居る馬連屯に招致したが、其中に前面の敵は非常な優勢なる騎兵であつたが、到る所で我長谷川少佐の大隊に撃退せられて、漸次に團山子、三眼井、救海窩棚と左方に轉進してゆく有様であつたので。

一時兵力を右の方に集めた奥田大佐は、今更義合屯に居る騎兵第七聯隊の二中隊の方が心配になつて來たので、直ちに王連窩棚に在る第五中隊を丁度此時折よく同地に到着したる、騎兵第一聯隊の第三中隊と共に大急ぎで義合屯に向はせて。今馬連屯へ歸つて來たばかりの第六中隊を第五中隊の代りに長谷川少佐の下に屬したが、此様な危急な場合であるから多少の混雜は何人とも免がれぬ所であるけれども、奥田大佐の此日の處置は實に非常に錯雜混淆して、殆んど豫め敵襲に當つて何等の豫定計畫がてしなかつたもの、様に考られるのは、老功なる此の大佐としては實に遺憾至極といはざるを得ぬ。

戦史附圖に就て五月十五日夜の同聯隊の配備を見ると、第一中隊が趙家窩棚にあり、第四中隊の二小隊が龍王廟子にあり、其餘りの一小隊が王連窩棚に居た様であつて、第二、第三中隊は馬連屯に配備してある。而して加島大尉の第二大隊は第六中隊を楊家窩棚に、第七中隊を岳家窩棚に、第五、第八中隊を大王家窩棚に位置せしめてあつた様である。左すれば何も此様に急に大騷

動をこねかへして敵が目前に迫つて来て、それが極めて速力の迅速なる騎兵である場合に、我内幕を氣どられる程な大混雜をやる様な不利益千萬な行動をする必要はない。要したならば岳家窩棚の第七中隊を王連窩棚に進めて、其西方高地の陣地を第四中隊の一小隊と相協力して占領せしめ、それを長谷川少佐に屬して、龍王窟子、趙家窩棚、王連窩棚の一團を長谷川少佐に指揮せしめ、楊家窩棚と大王家窩棚の三中隊を第二大隊長加島大尉に指揮せしめて、此の隊に左方義合屯の騎兵の危急の場合には收容をしてやる様に命令し。自から馬連屯に位置して依然第二、第三中隊を以て北方に向つて警戒すると共に、左方に若し兵力の必要が生じたならば、此二中隊を以て赴援する様にしたならば、右に左に建制を混亂せしめてやたらに狼狽するの必要は、評者などには決してないと思はれるのである。一體騎兵に對しては其現在の有様を變ぜずしてこれに當るがよいのであつて、敵の優勢なのを見て周章するから忽ち彼に其隙に乗ぜられるのである。少しく其場合は違ふけれども歩兵操典の左

の條項を一見したならば、奥田大佐も思半に過ぎることがあるであらふ。

『第一百八 沈著シテ射撃ヲ行フ所ノ歩兵ハ何等ノ隊形ヲ以テスルモ優勢ナル

敵ノ騎兵ノ襲撃ヲ無効ナラシムルコトヲ得ルモノトス

交戦中ニ在ル歩兵若敵ノ騎兵ニ牽制セラレ之カ爲メニ隊形ヲ變換シ又ハ

運動ヲ滯滞スルニ至ルトキハ既ニ敵ニ一籌ヲ輸シタルモノトス故ニ敵ノ

襲撃ヲ受クルニ方リ直接之ニ對スルヲ要スル部隊ノ外ハ依然其任務ニ服

シ之ト交戦ヲ企ツヘカラス

よしや交戦中にあらずとも、敵の騎兵の命令に服従してこちらから動きまはれば、つまりそれだけ騎兵に弱味を見せてつけこまれることになるのである。そこが騎兵の歩兵に對するつけ目である。それも豫め敵騎の其目前に現出する迄に其仕度がちやんと出来るならばまだしも、此場合の如きは殆んど突然敵騎が其面前に現出してから其部署を變更し、其配備を移動せしめたのであつて全く此の條文の戒を無視したものである。況んや其變更したる配備

が何等少しも以前の部署にまさつた所がないのであるから、唯無闇に泡をくつて周章狼狽してまご／＼したに過ぎぬのであつて。敵を撃退したのは依然前日來の舊位置に居つたものばかりで、移動變更さしたものは多くは何もせなんだのであつた。要するに此の場合に處したる奥田大佐の部署は、之を見ただともない程な優勢な敵騎の來襲に狼狽したといふ一言を以て之を掩ふに充分である。兎に角自分の手中に二大隊の兵力があるのであるから、敵騎の一千や二聯隊位は少し沈著して之を迎へれば、何の雜作もなくこれを撃退することが出来るのであるのに、第一大隊長に二中隊を屬して見たり、それに更に第二大隊の半分を加へて見たり、其又餘りの第二大隊の半分を自分の旗下に呼び寄せるかと思ふと、又其第六中隊を第一大隊長の手に移すなどは、實に不準備至極不手際千萬これは大に聯隊長殿の價値を代なしに下落させるものであつて。敵を防禦するに何等の効力なきばかりでなく、兵卒の心中に此の狼狽的部署の變更移動で恐怖心を起させる而已か、其聯隊長の伎倆を

疑がはせるに至るといふ大不利益を贏ち得た外に、此の配備變更から更に何等の利益をも得なだったのであつた。何に楊家窩棚方面に來た敵を王連窩棚の西方高地の第五、第七中隊が撃退したと、如何にもそれは其通りであるが併し第六中隊を楊家窩棚から動かさへせねば、此の中隊一つであの敵は充分に撃退が出来たのである。況んや第七中隊を岳家窩棚から王連窩棚西方高地へ進めれば、楊家窩棚の第六中隊と相應じて、此敵に十字火を喰はすることが出来て更に幾層有利であつたかも知れぬのである。

騎兵第七聯隊長白石千代太郎大佐は義合屯に位置したが、これも敵が徐家窩棚附近に進來するの報を得るまで、敵騎兵大集團の南進を知らなんだがそれは主として西方面に多く力を用ひて居た爲めであつて、此北方面には其指揮に屬する騎兵第一聯隊第三中隊が、既に十五日から拉々街に出してあるから、それに一任して置いた爲め強ちこれは白石大佐の責任ではない。此敵騎兵の近接の報を得ると共に同大佐は養合屯の圍壁を利用して騎兵と機關銃

とを配備し、一部を以て牛頭位を占領して、其大行李を速に康平に向つて退却せしめて、更に歸還したる騎兵第一聯隊第三中隊と歩兵第二十八聯隊から來た應援の第五中隊を、大王家窩棚附近に配置し三所相應じて、今や敖海窩棚から前進して我陣地に迫らんとする敵騎兵を猛烈に射撃したので、此の手剛は我が諸準備に敵は其突破を斷念して、終に遠く左方へ迂回して仕舞たのであつた。此の白石大佐が極々の寡兵を以て從來よりの位置を少しも變せずして、能く敵の大優勢なる來襲を撃退し得た位であるから。奥田大佐が狼狽せずして前日來の位置を守つて、沈著して敵を迎へたならば何の苦もなくこれを撃攘し得たに相違ない、然るに同大佐が矢たら無性に昂奮して騒ぎまはつたのは、頗ぶる不體裁であると共に實に遺憾千萬なことであつた。

斯くして敵は西へくと迂回して其前面には極めて少數なるものが居るばかりとなつて夜に入つたが、第七師團長は敏とくも此の騎兵を夜襲するを必要として、苟しくも機の乗ずべきあらばこれを逸せず夜襲を執行せよと注意

した。此方面の旅團長齋藤太郎少將現中將は此注意を受くると共に、それを歩兵第二十八聯隊長奥田大佐に命令したが。前にも述べたる如く奥田大佐は既に其心の平衡を失なつて其兵をどうくめぐりをさせた位であるから、到底これを執行するの計畫をする餘裕なく。其上に敵の宿營地さへも不明であるといふので、申譯だけに一、二中隊をあちこち少し動かして見たが、何等敵に對して夜襲らしいことをする迄には到らなないのであつたが。これは如何にも惜しいことであつて實に千歳の遺憾であると評者は思ふ。此の場合第七師團長の夜襲の發起は頗ぶる適當であつて、此の方法が巧に行なはれたなれば此夜限り敵は南進を斷念せねばならぬことになつたのは必然である。元より其宿泊地を明確に知ることは出來まいが、義合屯からまだ西方へ迂回したといふのであるから、概略の方角だけは知れた筈である上に敵は騎兵而已であるから、歩兵を以てこれを夜襲するのは左までの大困難事ではないと評者は信ずるのである。

敵の騎兵大集團が北方から迫つたが、それが我が堅固なる陣地の正面を避けて西方へ迂回した以上は、これは我が軍の背後を目ざして居るものと考へることが出来る、左すれば此の騎兵は最早北の方には居らぬのは明かである。既に大なる敵騎兵が北の方には居らぬものとすれば、康平附近に大なる豫備隊を握つて控へて居る必要はない。それであるから此の十七日の夕方第七師團長から夜襲の注意を受けたる齋藤旅團長は、それを狼狽し切つて居る奥田大佐などに命ずることは止めにして、竹迫中佐の歩兵第二十七聯隊の道藍套海にある第一大隊と、康平にある奥田大佐の歩兵第二十八聯隊の第三大隊とを以て、大夜襲隊を編成してこれを旅團長自から指揮して、十七日日没と共に騎兵第七聯隊の占領せる牛頭位に集合して、それ迄に此の騎兵及び歩兵第二十八聯隊の西方諸隊をして、敵の宿營地が何れにあるかを百方手段を盡して偵察させて置き、略其宿營地と看做すべき村落に向つて大夜襲を決行したならば、足手纏いを澤山に持つ騎兵のことである、此の果敢なる旅團長の指

揮する二箇大隊の大夜襲の爲めには、殆んど南進の希望を棄て、北方に退却するの已むなきに至つたであらふ。よし其夜襲が的確に敵主力の宿營にぶつからずして、其前哨の一部を撃破した而已に終つたとしても、敵は我が此の機動に富める大膽なる動作に辟易して、恐怖心を起すに至るのはいふ迄もあるまい。左すれば其志氣の勝利だけでも我軍の爲めには非常に利益であつたのである。若し又萬一僥倖にして彼の宿營したのは牛頭位から程近い諸村であつたのであるから、其主力の宿營地へ遮二無二突入し得たとしたならば、彼れミシチエング將軍の大挺進は、唯此の果斷なる一夜襲を以て其企圖を全く破壊せられたつたに相違ないのである。然るに齋藤少將は旅團豫備として自から一大隊を取りあげて居る奥田大佐の聯隊に夜襲を命じ、奥田大佐は申譯だけに夜襲をする計畫はして見たが、其兵力を集合する爲めに徒らに時間を費やして、終に鼻の尖に宿まつた敵騎兵に安穩に一夜を過ごさせたのは、何ぼう口惜しき齒がゆきことの限りではないか。第七師團長の發意した夜襲

の注意は至極時機に適合した注意であつたのに、旅團長も聯隊長もそれに熱心でなかつたものであるから、此の大好機をひざ／＼と無益に徒らに逸し去らしめて仕舞たのであつて。爲めに明日以來軍の後方に一方ならぬ大騒動を惹起せしむるに至つたのは、これ全く此の夜襲に關する第七師團長の注意が、適當に其部下に於て實行せられなんだに基因するといふも、決して誣言でないといふと評者は堅く信ずるものである。

惜しい哉齋藤旅團が義合屯から西方に向つて思ひ切つて夜襲をせなんだ爲めに、此夜敵は牛頭位西方の諸村落に安々と露營して一夜を過ごしたが。翌十八日朝になると敵の騎兵大集團が近く二牛街口、廬家窩棚、王二八窩棚等に宿營したのが知れて來たので、第七師團長は敵騎兵の來襲に當つては、これを康平の西北方に於て防禦せんと決心した。これは實に頗ぶる間違つた考へといはねばならぬと思ふ。昨日の夜襲の注意は至極結構であつたけれども、此の十八日朝の康平西北固守の計畫は全く時機に適合せぬ愚策であつた。何故

なれば敵の騎兵は其兵力五、六十中隊といふのであるから、これを多少敵に有利に計算してやつてもたか／＼五、六千のものである。それが昨日到る所で我が前哨に衝突してそれを一ヶ所も突破せずして、西へ／＼と大迂回をしたのであるから。彼れの計畫が我が前哨線の左翼を迂回して、我軍の背後を充分に攪亂せんとするにあるのは略推知することが出來様。左すれば昨日北方から壓迫して見ても相當に大なる兵力が貯はへてあるらしく、中々容易に通過し難かつた此の康平に向つて、又々西北方から來襲するの愚をなさずして、彼は直ちに我が軍の後方へ迂回進出せんと勉めるに相違あるまい。それであるから此日敵が來様と思ふのは確かに我が背後である、決して馬連屯や岔海撓やの方向ではなくして、必ず五裸樹、陶代屯、泡子沿の方角であらねばならぬと評者は思ふのである。

然るに第七師團長は此朝敵が依然西北から康平に向ふものと判断して、充分に其方面に而已意を注いだので、後方は全くから明きの姿となつたもので

あるから。敵は直ちに後方遙かなる陶代屯に迫り、一部を五裸樹、王家窩棚の方から反對に康平に向はしめ、主力を以て泡子沿から倪家窩棚、汀家窩棚の全く一兵の防備もなき、第一、第二の野戦病院を思ふが儘に襲はしむるに至つたのである、遺憾とも残念ともいはふ様がない實に何といふ手ぬかりであつたのだらふ。昨日來の歩兵の陣地を避けて西へくと迂回した敵騎兵の態度でも、今朝は必ず我背後に向ふといふことは想像が出来ねばならぬ、其想像が多少なりとも師團長の胸に浮んだならば、西の方を全く開放してある病院や其後方の彈藥縦列の非常に危険なのに氣がつかねばならぬ筈である。左すれば直接西東順山屯や馬家窩棚へ兵を派遣すると同時に、少なくとも歩兵一大隊位の兵力を陶代屯と五裸樹附近とに急派して、其左を泡子の湖水に托して後方諸縦列を掩護してやらねばならぬのが當然であつて。師團長の策こゝに出でずして唯々敵は西北から來るとばかり思ふて居たのに、忽然として西南から來侵したものであるから萬事大手違ひを生じて仕舞つて、第二野戦病院の

如きは退却準備中に敵にふん込まれて、福田一等軍醫以下人員材料を多額に敵手に委して辛ふじて退却するに至つたのであつた。若し此場合第七師團長が五裸樹、陶代屯に一大隊以上の歩兵を急派したならば、野戦病院は何等少しも危険なくして、敵は泡子湖以北に於ては何の得る所なきに了つたであらふ、であるから此の朝の第七師團長の決心は評者は頗ぶる不同意である。

我が此の手落ちに付け込んだるミシチエンゴ將軍は、岔海撓と五裸樹附近に少しばかりの騎兵を置いて、我が康平の諸隊をこれの方面に牽制して置き、さて主力を以て陶代屯から泡子沿方向に進み、無慘にも抵抗力なき倪家窩棚の第二野戦病院を襲ふて、其材料の大部分を分捕りすると共に、軍醫以下四十人を捕虜として仕舞つた上に更に一隊を康平——三台子街道上まで侵入せしめて、六百米突に亘る電信線を切斷せしめたのは、實に憎いやり方ではあるが敵としては至當なる處置であつて、我が第七師團長の決心の誤りはこゝに大なる犠牲を拂ふことになつたのであるが、此の場合敵の襲撃し來る前から

して、西五裸樹に居た歩兵第二十八聯隊第十一中隊の一小隊と、陶代屯に漸次退却して來た騎兵第七聯隊の第二中隊とは、其背後近く味方の野戦病院や彈藥縦列の宿營して居るのを知りながら、何等の警告をもこれに與へてやらなんだのは不都合である。或は此所に居ることを知らなんだかも知れぬが、左すれば康平に居た師團司令部には確かに知れて居たであらふから、早くこれに何れの方面にか避難せしむる様に飛報を與へねばならぬ筈であるが。何等それ等のことなくして泡子沿附近の銃聲に驚いて、引あげの準備最中に敵の騎兵が來襲したのであるから、其蹂躪するに任せるの外は殆んど處置がなかつたのであつて。これ全く師團長が敵騎が西北から康平に來襲するといふ誤まつた判断をしたのが抑、の原因となつて、此の野戦病院の大厄難と電線の大破壊をうまゝ敵にしてやられて仕舞つたのである。

此時三台子にありし第七師團彈藥縦列長山内定矩中佐は、其執銃者を以て一隊を編成して同村北端標高一一六高地を占め、敵の來襲に備へて居る所へ

騎兵第七聯隊の第二中隊が退却して來たので、それと相協同して汀家窩棚、四家子、馬家窩棚、陳家窩棚の線まで進んで來た、目に餘る敵の大騎兵團を喰ひ止めて健氣にも對戦を始めたが。彼れ等は此の沈著なる彈藥縦列の態度を以て全く我歩兵と誤解して、此方面から突破して南進するの勇氣なく直ちに右轉回をやつて泡子湖の西方を一週しつゝ、南進したので、危ぶない所で此の彈藥縦列は敵の蹂躪を免かれたのであつたが。これ蓋し山内砲兵中佐の臨機の處置が適當であつたのと、敵が此の我軍の主要補給路たる康平—法庫門道上には必ず有力なる守備隊が居るに相違ないと思ひ込んで居た想像の爲めに、此の臨時的にお雇ひ兵を歩兵と誤認したのであつて、全く此の彈藥縦列は非常な仕合せをしたのであつたが、考へて見れば實に危険千萬なることであつたのであつた。

法庫門の方面に於ても此日敵騎兵團の南進の報に接し、少なからざる大騒動を始めたのであつたが。乃木軍司令官は同地に居る永田龜少將現中將の野

砲第二旅團の左側が非常に危険になつたのを心配して、第一師團長に命令して其掩護に盡力せしめる所があつたが、此夜敵騎兵大集團は甄家窩棚附近に宿營して法庫門には近づかなんだので、此の日は其儘に日没となつて仕舞つたのであつたが、此の十八日に於ける軍の後方の之に對する防禦の騷動は實に容易ならざるものであつた。其中で最も適當であつたと思ふのは法庫門附近の警備計畫最中に於て、歩兵第二聯隊第一大隊長代理下野厚造大尉が、軍命令で其第三中隊だけを法庫門に残して他の三中隊を率ゐて、十八日の午前二時半頃法庫門西北の公主陵を占領したが、下野大尉が同地へ往つて見ると東北方遠く銃聲が遙かに響いて居るにかゝはらず、此地は長隘路中の一村で我が法庫門を掩護する爲めには極めて不利なる地形である、さればとて進んで羅下山の高地を占領すれば、退却に當つて殆んど全滅を免ぬがれぬ上に法庫門に遠くなり過ぎる患がある。そこで下野大尉は一度公主陵まで進んでは見たが、其不利を知つて直ちに其主力を後方孤家子に退ぞけて、此の公主陵

道と更に王爺陵道の交叉點であつて、公主陵の隘路出口を制すべき好陣地を占領し、其一小隊を軍所命の公主陵附近に残して敵の近接を速に知る様手配をして、それを終つて孤家子に防禦工事を始めたのは同日午後三時半頃であつた。

此の下野大隊長代理の處置は評者は大に賛成である、軍が公主陵と命令したのは不完全なる地圖で其概略の位置を示したのに過ぎぬのであるから、實際其地に進んだ隊長が其任務を實行するに不適當であると思ふた場合には、獨斷を以てこれを變更して速にそれを軍にも師團にも報告すればよいのである。況んや此場合の如きはゆつくり指圖を仰いで居られぬ場合であるから、直ちに自己の信ずる處を以て處置するの外はないのである。兎角代理などといふものは此様な場合に躊躇し易いものであるのに、此の下野大尉は斷然として獨斷を以て其位置を變更したのは、何でもなないことの様ではあるが實は評者は大に感心するのである。其上公主陵附近には一小隊を残して敵を監視

せしめたのであるから、全然軍の命令に背くことなくして、更に數倍も有利なる陣地を選定した譯であつて、此の上野大尉の獨斷は評者の大に同意する所である。其他法庫門附近には軍からも第一師團からも兵力を集中せられ、永田少將も必死に其寡少なる歩兵の加勢に其部下の砲兵を使用するの法を講ずるに努力せられたが、甄家窩棚に停止したる敵は遂に法庫門に迫まらなんだ。といふのは康平や法庫門の様な大部落には大なる守備隊があると信じて居たミシチェンゴ將軍は、可成其様な大部落はこれを利用して其中間に侵入して悪戯を擅まゝにせんと企てたので、比較的大部落には可成近接せぬ方針をとつたからであつた。

十七日の夜に於て夜襲を決行し得ずして、敵騎の所在不明の爲めに迷つて居る中に、背後の方で野戰病院を打ち壊された大迫第七師團長は、いつでも後手にノ、と計畫がなつて仕舞つたので、今度は一つ速に其退路を遮断せんとして奥田大佐に命令を下したので。奥田大佐は前哨にある長谷川少佐の第

一大隊の前哨を、康平の第三大隊と交代せしめて、師團の命令の如く張江窩棚と太平庄附近まで前進させて、早晚歸つて來るに相違ない敵の退路を遮断するつもりで、此の附近に陣地の構成に著手したのであつた。此の大迫師團長の考案は最もよいと思ふけれども、其位置と其兵力が評者は何れも同意でない。張江窩棚、太平庄は敵騎兵が南進の時に通過して來た道である、近い所に出す斥候でさへも其退路を異にするのが必要であるのに、まして敵線を突過して其背後深く侵入したる挺進隊が、同一徑路を歸つて來るものと考へたのは全く以て迂濶千萬である。此場合敵騎の退路を断絶せんとの目的ならば奥田大佐に歩兵二大隊、騎兵一、二中隊成し得たならば砲兵をも附して、それを敵騎が通過したる線よりも更にずつと西方に進出させて、其騎兵を南方に放つて彼が歸還を速に搜索して、之を途に要して野戰病院や大行李の不俱戴天の敵討をやるのがよいのである。然るに僅々歩兵一大隊をしかも敵が昨日通過したてのほや／＼なる太平庄附近に出して、そこに防禦工事を施こして敵

の歸りを待つに至つては、自分は餘りに其やり方の幼稚にして平凡なるに驚かざるを得ぬのである。退路遮斷の思著きはよいけれども其實施は其企だてに伴はなんだ、一體第七旅團長の思著は何れも至當である。昨夜の夜襲の注意でも今日の退路遮斷の命令でも、何れも其思著きは至極適當であつたけれども、昨夜は單に齋藤旅團長に注意を與へたばかりであつたので、奥田大佐は何にもせずにしたつたのであつたが。更に此の退路遮斷もそれと同様、折角よい考案はたてたけれども、其實施が全く申譯的であつて實際復讐的の熱情ある努力を缺いて居る。如何によい考案が浮んでもそれを實行せねば何にもならぬ、よしやそれを實行さしても其實行が其任務に伴なはぬ様なやり方をしては、却て兵力を無益に疲勞せしむる位がもうけもので、何の役にも立たぬのであるこれは大に考へねばならぬことである。

若し此場合大迫師團長にそれだけの考があつたならば、可成やれといふ様ななまやさしい注意や訓令に止めず、大切な大冒險なる企てであるから其隊

長をも人選して、はつきりと明確に命令を下してやらせて見るがよいのである。單に注意や訓令したばかりで部下が立派にやると思ふのは、それは第七師團長閣下まだ御了間がお若いぞえ。況んや其受令者の奥田大佐が頗ぶる昂奮狼狽して居るに於てをやである。此の兩好企圖の何れも無駄骨折になつて仕舞つたのは、勿論受令者たる齋藤少將、奥田大佐の責任たるはいふ迄もないことであるが、併しながら第七師團長も其實施に就て充分の注意監視を怠らつたといふ過失は、御氣の毒様ながら責任を負はねばならぬと評者は信ずる。十八日の夜は敵騎兵は比較的我軍と離隔したる、即ち法庫門からも康平からも約略四里を距れたる、甄家窩堡、大房身附近に宿營したので我軍では其位置を知ることを得なんだが、康平も法庫門も晝夜兼行で此の敵騎の現出に備へる爲めに忙殺されて居た。丁度此の大騒ぎ最中の十八日先著として法庫門に到着したる、第三軍兵站參謀長竹島中佐(現少將)は此日敵騎南進の報に接して、其兵站線路の非常に危険なるべきを感じたので、直ちに其旨を前進途中

にある兵站監小畑大佐に報告すると共に。後三台子の守備隊を午其堡子に、郝三家子の守備隊を法庫門西南の五里台子に向つて急行すべく命じ、其延長せる兵站線を至急に掩護するの手段を取つた。此の竹島參謀長の獨斷の處置は適當である、斯くまで優勢なる敵騎が挺進した以上は、必ず兵站線路を攪亂するが目的であるに相違ない。左すれば途中にある小畑兵站監の意見などを伺つて居ては間に合はぬ、直ちに急場の防ぎをつけて置いてそれを報告するの外に策がない。からして竹島中佐は全責任を一身で負ふて大孤家子附近の兵站線の掩護手段を取つたのであつて、此の果斷なる處置は評者は大に同意する所である。

十八日の夜甄家窩堡に於てミシチエンゴ將軍は左の第二軍司令官の命令を受けた。

『法庫門新民應道を行進する日本軍の輜重を捕獲し、其道路路上に行動して勉めて電信電話を破壊すべし』

此の命令を受けたる同將軍は、可成西方に迂回して此の目的を達せんとしたので、十九日の一日は公主陵附近で一寸小戦があつた而已で、遠く西方を通過して其目的とする法庫門新民應道を目ざして進んだので、此日は殆んど我軍と出會せずして、靠山屯、丁家房身附近に達して宿泊したのであつたが。此の十九日の拂曉に第七師團長が、又々騎兵の退却に當つてそれを取り逃さぬ様に奥田大佐に注意したが、此の歩兵第二十八聯隊長は何をどう考違ひをしたものか知れぬが、其手にある第二、第三大隊を急遽馬連屯の陣地に就かして十八日に王連窩棚に到着したる砲兵中隊を、更に岔海撓南方高地の陣地に就かしめたと戦史に記載してあるが。一體これは何れの方に向つて敵の騎兵の退路を遮断せんとしたのであらふ。評者には其向いた方角が一向に了解し得られぬのである。

馬連屯の陣地に兵を就かしめて、岔海撓南方高地に砲兵を置いたとすれば、これは多分北方に面して陣地を占めたのであらふ。これで大迫師團長が

「此敵の退却に對し空しく好機を逸することなからしめんと欲して」

奥田大佐に與へたる『退路遮斷』の注意の効力があつたのであらふか、勿論前面には大敵が居るのであるから油断は出来ぬ。がその方面には竹迫中佐の一箇聯隊が居るのであるから、此注意を得たる奥田大佐たるものは、一箇大隊を此の王連屯の陣地に殘して此附近一帯を警戒せしめて。自分は先に太平庄に出した第一大隊の方へ、歩兵一大隊と砲兵中隊とを連れて急進して、西草杆、札拉營子、哈拉沁屯間に行動して。敵騎兵の退路を要して復讐をしたいから、自分に騎兵一、二中隊を屬してくれといふ、意見具申を何故に第七師團長に呈出しなんだのであるか。斯くすれば思ふに敵の退却に當つて彼に辛き目を見せ得たに相違ない。然るに敵騎兵挺進隊の退路遮斷の注意を受けて、北に向つて王連屯の陣地を大急ぎで占領したに至つては、言語同斷沙汰の限りであつて、餘り其やり方が滑稽に過ぎてこれを眞面目に批評するはり合ひがないのである。くどい様ではあるが如何に注意しても注意の甲斐がない此の

奥田大佐に、又々注意を與へたといふのは第七師團長もよく／＼不明な人であつて、自分は少なからず齒がゆくて／＼堪らぬのである。勿論やたらに部下の行動に干涉するのはよくないけれども、さればとて今迄のやり口では此の奥田大佐には注意位できゝめのないのは明白である、左すればこれに斯く／＼こゝろ／＼せよとてきばき命令するがよいのである。それを又しても注意を與へるの舉に出でたのは確かに第七師團長の不明である、其不明なる師團長の許に此の様な滑稽を演ずる聯隊長が出来たのであるから、全く以て此の方面のやり方は始末におへぬと評する外には言葉がないのである。申し過ぎるかば知れぬが今少し第七師團長が自から責任を負ふ考を以て、十七日夜以來思ひ著いた考案を命令を以て實行さしたならば、非常に我軍に利益であつて敵は大困難に陥つたに相違ないのに、注意／＼で終に流星光底に長蛇を逸し去つたのは實に千歳の遺憾とはこのことであつたらふ。

そこで戦列諸隊のことは一先づきりあげて、これからそろ／＼兵站守備隊

の戦鬪の研究に移るが、十九日は全く無事で二十日には法庫門の南方にも少しは敵が向つたが、これは大したこともなかつたのでそれは全くぬきにして、今から全く兵站守備隊の戦鬪のことに就て意見を述べることにし様。

五月十八日午前三時後備歩兵第四十九聯隊長が、後三台子に其隊を置いて此附近の守備に任じて居る所へ、在三面船の渡邊兵站司令官から大至急の飛報を以て、小畑第三軍兵站監の左の電報命令を送達した。

- 一、敵ノ騎兵約五十中隊康平西方ヲ南下ス
- 二、其聯隊ハ明十九日午其堡子附近ニ前進シ西北方ニ對シテ警戒シ大孤家子ヨリ三面船ニ至ル我兵站線ヲ掩護スベシ
- 三、給養ハ大孤家子ヨリ受クベシ
- 四、後備歩兵第五十聯隊第一大隊ハ二十二日五台子ニ至リ西北方ニ對シ警戒スル豫定ナリ

西方中立地帯に近い此の兵站守備隊は、常に油断はして居なかつたけれど

も左までに警戒を嚴にしては居なかつたのであるが。突然此の飛報に接して上下一同大歡喜である、今度こそは老たりと雖ども數回の戦役に練りあげたる腕前を見せて、一つ青二才の現役兵どもに吃驚仰天さしてやらんとこの大意氣込みで、勇み進んで出發準備にとりかゝつたので程なく其結束が出來あがつた。そこで聯隊長は概要左の如き命令を下したのであつた。

- 一、敵騎約五十中隊康平西方ヲ南下中ナリ
- 二、聯隊ハ即時出發午其堡子附近ニ移リ此敵ニ對シ大孤家子ヨリ三面船ニ至ル兵站線路ヲ掩護セントス
- 第一大隊ハ王家窩棚附近ニ位置シ右翼後茨榆溝ヨリ左翼紅上墻子西南高地ニ至ル間ヲ警戒スベシ
- 第二大隊ハ小造化屯附近ニ位置シ右翼芹菜泡ヨリ石摺子小孤家子ニ至ル間ヲ警戒シ左翼後歩第五十七聯隊ト連絡スベシ
- 第三大隊及機關銃隊ハ午其堡子ニ位置シ前後興隆峪附近ヲ警戒スベシ

各大隊ハ準備整頓次第各個ニ戰備行軍ヲ以テ速ニ所命ノ地ニ至ルベシ
 三、予ハ第三大隊ト共ニ行進シ守備地到着ノ上ハ第三大隊ト共ニ午其堡子
 ニアリ

此の聯隊長の命令は急場合に於ける至當な處置であつたと思ふ。而して此
 聯隊は既に此の後三台子に在つて兵站守備に任じて居たのであるから、其全
 力を擧げて北進することは不可能であつたのである。からして第一大隊は第
 二中隊を第二大隊は第五中隊を第三大隊は第十、第十一中隊を、何れも此の後
 三台子附近の舊守備地に殘して前任務を續行せしめて、其日即ち五月十九日
 午前八時を以て各大隊は宿營地を出發して、急行其新守備地に向かつて進ん
 だのであつたが。各大隊は何れも午前中に其目的地に到着して、敵情地形を
 偵察して西北方に面して警戒の手段を取り、聯隊本部と共に進んだる第三大
 隊と機關銃中隊は他より稍遅れて、午前十一時午其堡子に到着し宿營に關す
 る命令を下して。二、三の將校斥候を直ちに派遣して敵情の偵察に勉めたので

あつたが、別に左したる敵情に就て得る所もなく日没に至つたのであつた。

然るに此夜午後九時半過、在大孤家子兵站監部よりの至急の命令を聯隊長
 は受領したのであつた、其要旨を掲れば大略左の如きものであつたのである。

一、本日午後四時頃敵騎約千五百小二道房申ニ現ハレ同地ニ在ル砲兵旅團
 ノ彈藥大隊ト交戰中ナリ

二、貴官ハ歩兵一大隊ヲ即時出發同地ニ急行セシメ速カニ該敵騎ヲ擊攘ス
 ヘシ

何等の異狀なく急行軍の疲れで今や眠りに入らんとする時、此の大至急の
 警報に接したので聯隊長は其赴援を第一大隊長少佐土山小一に命じ、土山少
 佐は輕裝を以て其大隊三中隊を警急集合を行なはしめて。不知案内なる生地
 を夜間三里餘り急行して、小二道房申に到着したのは彼れこれ翌二十日午前
 零時頃であつたが。同地へ往きついで見ると昨日少しばかりの敵騎が來たの
 は事實であるが、夕方までに退却して仕舞つたので敵に就て得る所はなかつ

たのであつた。土山少佐は實は馬鹿な骨折をしたのであつたが何時敵が現はれるか知れぬのであるから、小二道房申北方高地に露營して警戒をさく／＼怠りなかつた。一方聯隊長は土山大隊を小二道房申に急進せしめると共に、其大隊の守備地へ取り敢へず其手中にある第十二中隊に機關銃二挺を附して派遣して、これを半拉山呼に位置せしめて土山大隊の守地の警戒に任じたが。萬一小二道房申に敵の騎兵が居らなんだ場合を顧慮して、若し第一大隊が其當面の敵の踪跡を失するに至つたならば、そこに停止して居らずして舊任地たる王家窩棚の方へ歸つて来る様に翌二十日の朝に命令を送つたのであつた。又此の土山大隊が出發すると相前後して、芹菜泡の第六中隊長宇野大尉から左の如き報告が来て、機關銃の配屬を希望したのであつた。

- 一、敵騎約二千余、家窩棚及び其附近ニ宿營セルモノ、如ク土人ハ一般ニ深ク恐怖ノ念ヲ懷キツ、アリ
- 二、機關銃若干ヲ當中隊ニ配屬セラレシコトヲ切望ス

夕方迄には何等の敵情も知れなないのであつたが、夜の十時頃には一方には小二道房申の赴援があると共に更に今又一方からは、余家窩棚に敵騎兵二千の宿營を報じて來たのであるから、此の後歩第四十九聯隊の明日の任務は非常に重大になつて來た。て聯隊長は宇野大尉の請求を諒して直ちに機關銃二挺を之に増加したが、此の機關銃は翌二十日午前一時に第六中隊の陣地に到着したのであつた。斯の如く一度就寝しかけた此の聯隊は、徹夜種々なる重要な情報を得て防禦の準備にかゝり、大に明日の爲めに努力して居る中に愈二十日の拂曉とはなつたのであるが、此時に於ける後歩第四十九聯隊は實に左の如き配置にあつたのである。

小二道房申

第一大隊(第二中隊欠)

半拉山子

第十二中隊及機關銃二挺

午其堡子

聯隊本部、第三大隊本部、第九中隊及機關銃四挺

芹菜泡

第六中隊及機關銃二挺

小造化屯

第二大隊本部並ニ第八中隊

大辛屯

第七中隊

即ち正面約五里の間に後備歩兵三大隊の實員二箇大隊を、處々方々へばらまいたのであるから頗ぶる心細いものであつて、如何に騎兵であるとはいへ彼は五十中隊からの大優勢であるから、油斷をすると如何なる苦戦に陥るかも知れぬのであつたが。此日に於ける我後備諸兵の意氣は殆んど敵を呑むの概があつたのは事實であつて、最も其勇氣の旺盛なるは頼母しき限りであつたのである。

敵が來なければ直ちに舊守備地へ歸らんといふ考で居た土山少佐は、翌五月二十日午前七時三十分頃に忽ち大なる敵の騎兵部隊を其前面に發見した。彼等は西方大蛇山子、大房身の方から陸續として前進して來て、紅上墻子西方の高地に集合して、其一部は我右翼に當る大小營子の方から迂回せんと

する狀況があるので。直ちに其大隊を以て小二道房申を堅固に占領すると共に、其一小隊を大二道房申に派遣して彈藥大隊と共に其村の圍壁に據らしめて、さて其趣を急報を以て午其堡子の聯隊長に報告した。

此の土山少佐の處置は適當である、昨夜は全く無駄骨折の様であつたが今朝に至つて忽ち其赴援の効が顯はれた。若し此の大隊がこゝに來著して居らなんだならば、此の二十日の朝には此の砲兵の彈藥大隊が大分痛い目にはなされて居たに相違ないのであつたが。乃木大將が兵站守備隊の來援を希望する旨を、竹島參謀長から在大孤家子の小畑兵站監に傳達し、それが昨夜の午後九時半過に聯隊に到着して、此の土山少佐の急行加勢となつたのであつたが。これあるが爲め砲兵彈藥縱列は助かつたけれども、爲めに後歩第四十九聯隊は其一半の兵力を北方に取りあげられて仕舞つたので、此日の戦闘は非常に手不足になつて仕舞つたのは實に餘儀ない次第であつた。

敵の騎兵は殆んど前面に充滿して居たが、午前十一時三十分頃になると敵

は土山、少佐の小二道房申を、後茨楡溝、前四家子、後四家子、小營子の南西北の三方面から包圍して、馬上の儘で猛烈なる射撃をなしつゝ、攻撃して來たが。今まで満を持して沈著して居た同大隊は五百米突の照尺をかけて此の大目標の騎兵の攻撃を、近距離から急射撃を以て歡迎してやつたので敵は非常な大打撃を受けて、ほうくの體で前後四家子の村落内に逃げ込んで仕舞つたが。此時遙かに紅上墻子の方を見ると三、四百内外の群をなしたる騎兵の縦隊は、紅上墻子西南方を南に向つて我本隊の方へ進む模様であつて。其縦隊の數は實に十二縦隊の多きに達し、其兵力は確かに四千以上であつて、此の土山大隊の方へ向つて來たのは其中の四箇縦隊に過ぎぬのであつた。敵は此の正午頃の我急射撃の御馳走で満腹したものか、最早小二道房申を窺ふ模様がなかつたが、其中に永田少將の派遣したる野砲第十七聯隊の第一中隊が、遙かに蔭城子から小蛇山子附近の敵騎の集合地に勇ましく砲撃を加へ出したので。敵は此方面に見切りをつけて何れも南方さして前進して仕舞つたのであつた

が、それが午後一時前後のことであつて其後は此方面は大風のあとの如く、全く敵騎の跡をたつに至つたのであつた。

土山大隊が急行小二道房申に移るに際して、聯隊本部と連絡したり又は半拉山子の第十二中隊と交通したりする道路の警戒と、其輕裝で出發した爲めに残して置いた武裝の番人とを兼ねて、前茨楡溝に軍曹川島清次郎に歩兵一分隊約十五、六人を附して残して置いたのであつたが。此の分隊は二十日の早朝から敵の騎兵と交戦して、後には一中隊の敵の騎兵に全然包圍されて仕舞つたのであつたが。其村落の北端にある堅固な圍壁のある一廓を占領したる川島軍曹は、此の大敵に包圍せられても神色自若少しも恐怖したる模様なく、頗ぶる沈著して此の敵と應戦しつゝ、部下を勵まし、大聲其部下に告げて曰く「歩兵操典に何とある、沈著して射撃する歩兵は何等の隊形を以てするも優勢なる敵の騎兵の襲撃を無効ならしむとあるではないか、操典はいゝ加減なことを書いたものではないぞ、皆我々の先輩が血を流し命を棄てた實驗から出

來た原則である。況んや我々は今容易に敵が飛び越しては入れぬ圍壁に據つて居るのであるから、百萬の騎兵が來ても少しも恐るゝことはない、操典は決して我々をだます氣遣はないのであるから、狼狽するな決して恐れるな沈著して照準を確かにして射撃をしろ」と、まるで新兵を各個散兵にでもつれていつた格で懇切に教育しながら敵と對戦して居たので。流石老功なる其部下の後備兵は何れも此指揮官の勇敢沈著なる態度に感化せられ、露助の騎兵の千匹位は一人できつと引き受けて見せるぞと放言しつゝ、油斷なく頑強無双なる抵抗を繼續して、敵に多大の損害を與へて終にこれを撃退したのであつたが。土山少佐は此の分隊は到底全滅したか又は半拉山子へ合したかと、非常に心配して敵が退くと共にこれが安否を第一番に尋ねにやつたが、彼等は意氣衝天の大勢で此の前茨楡溝を完全に守備しおぼせて居たので、土山少佐は大に安心すると共に其勇氣に舌をまいたとのことであるが。これ大に騎兵に對する歩兵の等閑視すべからざる好戦例であると評者は考へるのである。

半拉山子西方高地上に歩兵一中隊と機關銃二挺の陣地を築き、其二分隊を獨立下士哨として王家窩棚西端に出してこれも防禦工事に據らしめたる第十二中隊は。朝來前面には雲霞の如く敵の騎兵が群集しつゝ、南進するのを見て居たが。此の中隊の陣地の方へは敵が不思議にもよつて來ないのであつたが。午前十一時頃瞻家窩棚の近邊から六百ばかりの騎兵が散開して前進して、其三分の一程が徒歩戦を始めたけれども、充分近よせて全滅に陥らしめ様といふ考で、應射せずして居たのであつたが、丁度此時王家窩棚に出してあつた獨立下士哨は、其西方から進んで來た六七十騎の一群と猛烈に射撃を交換して、主力の鎮黙して居る中に終にこれを撃退して仕舞つたが。それと同時に半拉山子の第十二中隊へ向ひかけた敵騎兵も西南方へ退却して仕舞つたので、此の中隊は此日終に射撃を開かずに仕舞つたのであつたが。何でも塔子山の方向と思ふ方から其後三發の砲彈を我中隊の陣地へ對して送つたが、中隊には何等の被害もなかつたのであつて、それが千秋樂で此の中隊の附近に

は全く敵が居らなくなり、正午頃には悉皆西南方に轉進して仕舞つた。右の如く此の第十二中隊は僥倖にして敵騎の襲來を受けなからよいが、若し敵の騎兵の大部隊がこれを包圍した場合には、何等西北に向ふて築いた塹壕の外に據るべきものゝない、此の小丘の上の陣地では到底敵を防ぎおぼせることは出来ななだであらふ。若し強いて此の山上で敵と對戦する考なれば、敵の包圍を受けたる場合には何れに向つても對戦し得られる様に、據點式に防禦工事を施こして置くのが必要で。左なくば半拉山子の村落の圍壁に據つて敵に對し、其各道路を閉塞して敵騎の外部よりの侵入を防ぎて敵を待つのが至當であつて。此丘上の陣地では到底永く優勢なる敵騎と對戦して、此地を固守することは不可能であつたらふと評者は思ふ。

午其堡子聯隊本部の方面に於ては此日午前八時半、敵騎兵が西と北との兩道から進來して五百乃至八百米突まで近接したが。當時此地には聯隊本部と第三大隊本部は居るけれども、實際の兵力は僅かに第九中隊と機關銃が四挺

あるばかりであるから。昨夜來其西北丘上に三ヶ所の塹壕を設けてそれに歩兵二小隊と機關銃四挺を配布して、堂々として陣を布いて居つたのであるが、甚だ以て心細い次第であつたが。今現出した敵の騎兵に對して射撃を開始して見ると、敵も一時は退却したが其後續部隊は非常に多數であつて、再び攻撃し來らんとする氣勢を示したので、此儘の配備では長時間之に對應するのは餘程困難である實況であつたが、諸方面から數度之に迫つて見た敵兵は幸にして甚だしく接近せぬ。我第十二中隊は敵の近接を待つて有効なる猛火をあびせんと考へて我慢をして應射せずに居ると、敵も其沈著したる態度を何とか氣味悪く思ふたのであらふ。容易に我が誘致せんとする計略には乗らずして、唯遠方から緩慢なる馬上射撃をして居る而已であつたが。其中に敵騎の一部は塔子山、土井子の方から西南方にまはり込んだ模様で、今や午其堡子を包圍せんと企だてる形勢を現して來たので、寡兵では到底これを防ぎきれぬと考へたる聯大隊長は、半拉山子と小二道房申へ來援を求める急使

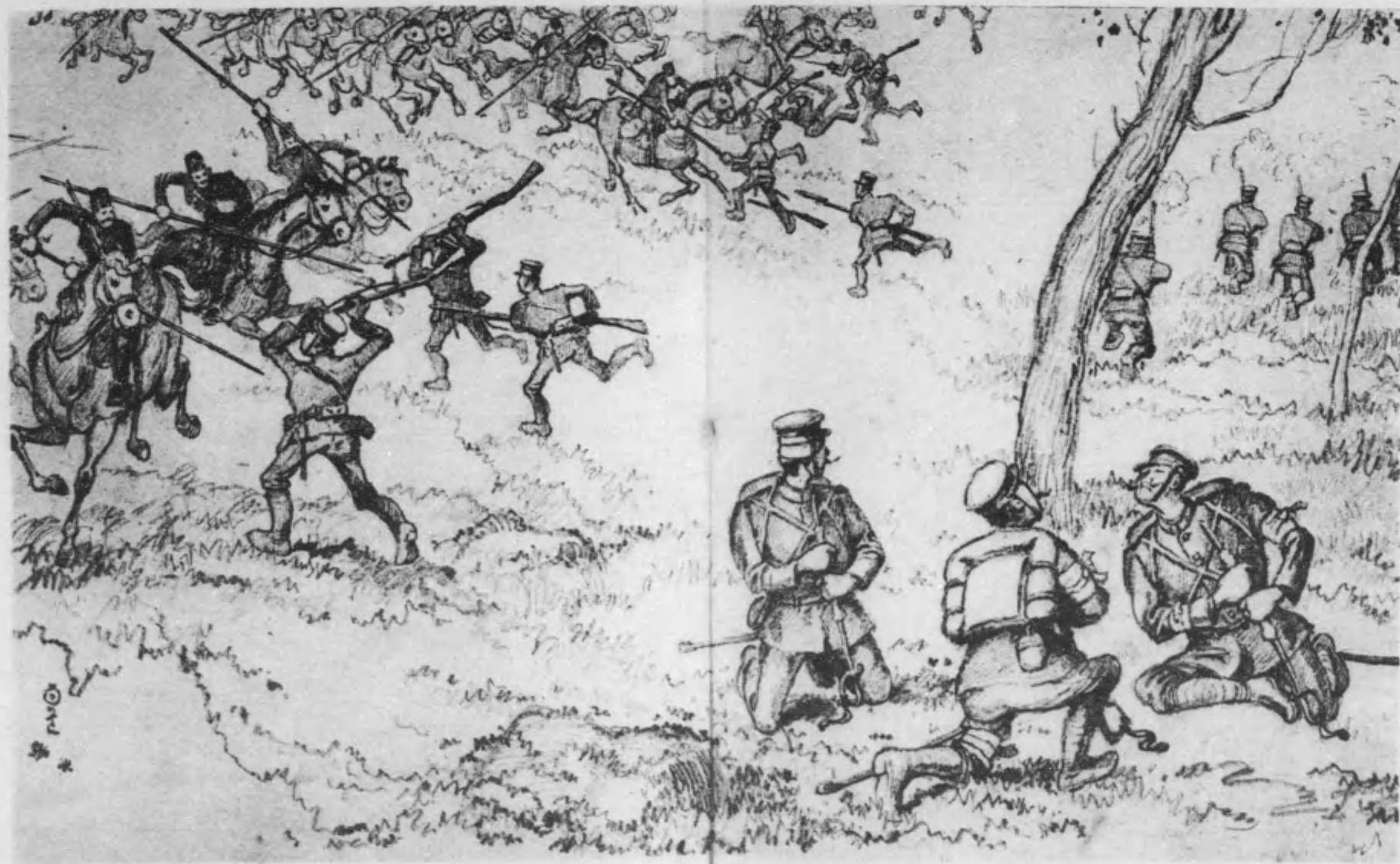
を出したが、これは途中で敵騎に妨げられて何れも目的を達せなんだ。彼是れする内に土井子の西北には非常に莫大なる敵の騎兵が集合し、又遙か東南方に當り頻りに銃聲が聞えると思ふ中に、濃密なる黒ろ烟りが焔々として渦をまいてもえあがつたので、其すさまじさは實に言語に絶した有様であつた。後に聞くとこれは敵騎が我が兵站線路に於て糧車八百輛を焼夷したのであるとのこと。こゝに於て村に残つて居た第九中隊の一小隊と機關銃一挺を午其堡子の西及び南端に出して、今や西南の方から迫らんとする敵騎の大部隊に備へると共に。聯隊長と大隊長は到底斯くまで優勢なる敵騎に包圍せられては、此儘配備を變へずに居れば全滅に陥るの外はないから、一先づ西北山上の陣地にある歩兵二小隊と機關銃三挺を、至急に此の村落内に收容して此の堅固なる圍壁を死守し、以て敵と對戦するの外に手段がないと決心して。敵にさとられぬ様にそろ／＼其準備をして、將に此の午其堡子の村落に彼の山上の兵力を引きあげんとする其内に、二十日の午後の二時頃から漸次敵は南

進を始めて、其莫大なる主力は小造化屯の方へ移つて往つて仕舞い、一小部隊が土井子附近に居るばかりで、他は全く其影を見せぬ様になつたのであつたが。此日後備第四十九聯隊長は全く非常なる寡兵を以て此の午其堡子の村落にとり籠められ、部下諸隊との交通連絡を敵に遮斷し盡くされて、唯だ此の一村を歩兵一中隊と機關銃四挺で辛ふじて守りおぼせたといふ外には、他の應援も出來ねば其指圖をもすることが出來なんだのであつて。これ此の場合事實全く已むを得ぬ次第で、これは何とも是非がないといふの外はなかつたが、一方から考へて見ると頗ぶる腑甲斐ないことであつた。併し最後に全部村落に入りて此地を死守せんと決心したのは同意である、流石にこれは歴戦の効の教へたものであつたと思ふ。又あれ程の大敵が近く土井子へ集りながら此村落に眞面目の攻撃を試みなんだのは、其陣地には鋭利なる四挺の機關銃が備へてあつて、それが猛烈に騎兵の來往進退を間斷なく射撃するので、こゝには大分大なる部隊が配置してあるであらふと考へて、此の村落を大概

にして見すて、西南方へ進んでいつて仕舞つたらしい。斯くて聯隊本部、第三大隊本部は無事で済んだが、此の指揮官達は全く其部下を巧に指揮するの手段方法を失なつたので、各大中隊何れも各個各別に孤立奮闘をしたといふ結果になつて仕舞つたのであつた。

此日の戦闘の最も酷烈を極めたのは何人も知れるが如く、芹菜泡附近であつたが、此の地の状況は如何なる都合であつたかといふと、歩兵大尉宇野新十郎は其部下の第六中隊を引率して、五月十九日此の芹菜泡へ到着すると共に直ちに地形の偵察を行ない、主力の陣地を同地西北の高地上に選定し。西北に面して小隊毎に二個の散兵壕を構築し始めたが、容易に其工事が完成せぬので此十九日夜の月明を利用して工事を續行し、全部同山上に露營をして警戒を嚴にしたのであつたが。此の陣地は中隊主力の二小隊で守る考であつて。他の鈴得中尉の一小隊はこれを自家窩棚へ分遣して、其西北の山を占領せしめて左方石摺子迄の間を警戒することにしたのであつたが。此の宇野大尉は

滅全ノ隊備守泡菜芹



畫道白厚石人遊九十九

中々に注意深く陣地到着以來諸方に多くの斥候を出して、敵情の搜索地形の
實査に熱心に努力したる結果、近く其西北約一里程の余家窩棚に敵騎二千の
宿泊せしを探り知つて、愈、其警戒を一層嚴重にしたと共に、此重要なる報告
を呈するの序を以て機關銃二挺の増加を聯隊長に要求した。然るに聯隊長は
直ちに其希望を入れてくれて、二十日午前二時半其機關銃が陣地に來著した
ので、全中隊の志氣爲めに大に振起して直ちに其掩體の工事に著手して、夜
の中に其二銃を西北雷旗堡子を射撃し得る如く陣地に就けて射撃を準備した。
翌二十日の拂曉と共に標草勾、羊圈子、余家窩棚に斥候を派遣して、聊の油斷
もなく敵の動靜に注意をして居たのであつたが、午前七時北面の散兵壕の西
北の隅に居た宇野大尉は、雷旗堡子西方四、五百米突の高地上に何か動くもの
を認め、それが其中に三、四人に増したがこれは敵兵に相違なかつた。それ
が隠れると又白馬に跨がったり下馬したり種々なる敵兵が出没したが、其の
中此の乗馬者は忽ち數十騎に増加して、暫く我陣地を偵察するものゝ如く見

へたが程なく何れも山の蔭へかくれて仕舞つた。これによりて愈々大敵の漸次
近接しつゝあるを察したので、直ちにそれを聯隊長及び大隊長へ報告したが
最早此の時は約一里東方の、午其堡子と南方の小造化屯との間には敵の騎兵
が既に侵入して来て居た爲めに、此報告は何れも達するを得なんだから大隊
長も聯隊長も、芹菜泡の非常に危急に迫つた状況を少しも知らずに居たので
あつた。

午前七時十分頃になると雷旗堡子西北高地より稍、西北方にあたる、距離約
二千米突餘りの所を急速なる歩度で、行進し来る二百餘騎の騎兵の集團が見
へたので、六人の下士斥候を雷旗堡子を経て其敵兵の方に派遣したけれども、
最早此の雷旗堡子には三十餘の敵兵が居つて射撃したので、其目的地點まで
いつて敵情を偵察すること能はずして空しく陣地へ歸還したが、此頃から時
々雷旗堡子からぼつ／＼緩徐なる射撃を敵が開始したので、愈々敵の近接を知
り戦備を整へてさあ来いきたれとこれを待つて居たのであつた。

敵は諸方面に於て大活動をやつて居る様子であつたが、午前九時少し過ぎ
になると突然塔子山の方向から約五百騎の敵が現はれて、我が陣地の右側背
に向つて進んで来たが、これにはまだ其後方に後續部隊が澤山にある様子で
ある。これと同時に前面雷旗堡子の方面に於ては敵騎の数が益々増加して、我
が陣地からはまだこれに應射せなんだに係はらず、何れも徒歩して其村端を
占領して猛烈なる射撃を開始するに至つた。これと相前後して陣地の西北方
千五百米突の地點に出して置いた我停止斥候は、急射撃を以て敵大兵の進來
を報じつゝ退却し來り。又塔子山北方高地にも敵兵新に現出して、距離が過
遠であるにもかまはず盛んに我れに射撃を指向する。午前九時二十分頃にな
ると先に斥候を出してあつた西北千五百米突の地點に、敵騎百餘騎現出して
塔子山北方高地へ向つて側面行進を始めた。そこで距離が少し遠いけれども
北散兵壕中の良射手四五人に指名して、これを射撃せしめて確かに其四騎を
射倒したので、幸さきよしと中隊は志氣大に壯んになつたのであつた。

此の敵に次て敵騎約三百羊圈子の北方から、塔子山北方高地の西脚に沿ひ側面縦隊を以て進んで來たので、北散兵壕の右翼に配備したる機關銃一挺をしてこれに向つて射撃を開かしめ、壕内の歩兵にも其射方向の角度の許す限り、機關銃に協力して此敵を射撃せしめて、一時は之を撃退し得たけれども暫時にして、敵は此方面に機關銃數挺を持ち出して我に當り、百餘騎の兵を以て塔子山北方高地の南脚に散開して、既に先刻より射撃を我に指向して居る同高地の上の敵と相協力して猛烈に射撃し。又羊圈子の村端にあつた敵兵も徒歩戦に移つて益々我れに迫つて來る。然るに我陣地の防禦工事は既に此時此の塔子山方面に對しては、これを充分に利用し得ることが困難になつて來た。それと知つたかどうかは知らぬが敵は猛烈至極なる射撃を以て、此の方面から北散兵壕を側射するのであるから、甚だ以て我が爲めには不利益至極であつたのである。

稍、險惡になりかけたる戦況は午前九時半過から愈々一層の激烈を加へ、雷旗

堡子からの敵弾は非常に猛烈な勢を以て陣地に雨下し、其兵力の頗ぶる我れより優勢なるを思はしむると共に、塔子山北方高地には時を追ふて敵兵の數を増加し。其數は見る間に我れに幾倍するに至つたけれども、幸にして其の距離が遠かつた爲めに其割合には味方に損害を與ふることが少なかつたが、前に塔子山から我右側背へ迂回したる敵の騎兵は、此時に至つて忽ち徒歩戦を始めて堂々と進み出して、我が陣地の全く背面から北方に向つて攻撃を始めて漸次我が後方に迫るに至つた。流石勇氣に満ちて居た守兵も全く背後から驟雨の如き敵弾を受くるに至り、其折角の防禦工事が此方面には全く用をなさぬに至つて、少しく閉口せざるを得ざる模様であつたが、沈著にして剛毅不屈なる中隊長宇野大尉は陣地の中央に直立して、包圍し來る敵に對して四方に眼をくばりつゝ、其沈毅勇敢なる態度を以て部下に範を示しつゝ。百方に注意して此の東西北三面から包圍したる敵と對戦して、露聊かも驚愕したり恐怖したる様な有様を見せなんだので、我守兵等はこれに其氣をひき立

てられて、こゝを先途と必死に防戦に努力した。

三面よりの射撃が飛霰の如く前後左右に降り下る折から、午前十時三十分頃になると、塔子山北方高地の南麓の方に當つて敵の騎砲が砲列を布く模様であつたが、程もあらせず此の砲兵は我陣地に向つて烈しき砲撃を開始した。此の砲兵の側射の爲めに第六中隊は死傷にはかに増加するに至り、頼み切つたる機關銃隊長を始めとして死傷するもの頗ぶる多く。砲撃が益々其猛烈の程度を加へ來ると共に、戦鬪は正に酣にならんとして時々刻々に其酷烈凄惨の度を増し來り、今や全く此の第六中隊の二小隊は、敵の重圍の中に陥つて仕舞つたのであつたが、それに少しも怯るまらずして益々其勇氣を發揮して、中隊長以下上下一同全滅を賭して此の陣地の拒守に熱中して居ると。忽ち見る塔子山の南方より敵騎約二十中隊程密集の梯隊をなして泰山のゆるぎ出るが如く進出し來り、將に勢に乗じて我陣地の背後を衝かん爲めに殺到するの意氣を示したので。すは一大事と西部散兵壕内に備へたる機關銃を、全く掩體な

き陣地の東南端に移して後ろ向きに此敵を猛射せしめ。斯く後方から澤山なる敵の攻撃を受けるに至つたので、既設の塹壕は悉く敵彈の雨をしのぐに何等の利益もなくなつたので。雷旗堡子の敵と相對抗する北部散兵壕の一部の外は、何れも壕外に進出し敵火に曝露して急射撃を行なひ、以て今まさに我れに進襲し來らんとする敵騎兵の大部隊の前進を防いだ。此時中隊長は高く其軍刀をあげて一同の注意をひきつゝ、大音聲を以て、

『中隊は縦ひ此の山上に屍の山を築くとも決してこゝを退却せぬ、斷乎として此の芹菜泡を固守して任務を果す覺悟である。よしや多少の苦戦をするとも一兵のあらん限りは此の要地を決して敵に渡してはならぬ』

と嚴然として宣言して自から彈雨中に勇敢に動作しつゝ、熱心に其部下を督勵して極力防戦の方策を講じたのであつたが、何をいふにも西北に面して工事を施こしたる此陣地が、数十倍の敵兵から全く包圍されて仕舞つたのであるから、折角の防禦工事も殆んど何の用をもなさぬ。それに此陣地全體は

敵砲兵の有効なる猛烈を極めたる側射を受ける上に、殆んど四面から數千の銃を以て小銃彈を送られるのであるから、よしや騎兵の下手な射撃であるとはいへ、其苦戦の程は實に想像も及び兼ねる程な困難であつたのであつた。

宇野大尉の力によつて辛くも頑強に此の防禦を持續して居る中、午前十一時半頃になると鈴得小隊の居る自家窩棚の方面にも亦猛烈なる銃聲が起つて來た。擴くして芹菜泡は愈々全く四面からの重圍に陥り、それと同時に西北方及び羊圈子塔子山北方高地の敵兵は、砲兵の猛烈なる砲撃と相應じて急射撃を開始して、我が中隊の死傷益々多く就中大切なる機關銃の士卒は、敵砲彈の爲に無慘にも悉く死傷して、彈丸は残つて居るがこれを使用することが出来なくなつて仕舞つた。全體機關銃の使用は我陸軍では其人を限られて教育してあるので、誰れにでもこれを使用することが出来ぬのみか、後備兵の中には此戦役に召集されてから始めて機關銃を見たものもある位の有様であつたから、其専門家が皆死傷して仕舞つた以上は、此の文明の大利器も全く無用

の大長物たるに過ぎぬのである。残念ながら使用の方は斷念して漸やくのことして一挺だけは機關部を分解して、萬一の場合敵手に落ちてもしよい様に始末をしたが、他の一挺は何としても分解が出来なだったので其儘にして置いたといふ始末。今や一挺の銃でも欲しくてならぬ惡戦の眞つ最中に此の有利なる機關銃がありながら、それを使用することが出来ぬのであるから、實に残念とも口惜しいともいはふ様なさ有様で、天を仰いで武運の拙なさを歎息するの外はなかつた。

我が此の弱り目につけ込んだる敵騎兵の主力は、恐ろしき様なる大密集隊の三梯隊を作つて前進を始め。芹菜泡南端と其高地脚とに向つてよそ目もふらず突進して來て、愈々襲撃を執行せんずすさまじき勢を現はして來たのであつた。前にも述べたる如く中隊長は全く此地を枕にして全滅するまで防戦をつゞける考であつたが、今や機關銃は全然使用することが出来なくなり、敵の銃砲火の爲めに死傷續出して人員の甚だしく減少した上に、敵の騎兵は其

大主力を以て進襲し來らんとする危機一髪に瀕したので。流石の宇野大尉もこゝに以前の決心を翻がへして、重要書類や地圖等の敵手に委してはならぬものを破棄して、外套、背囊其他の進退を妨ぐるもの一切を陣地に遺棄し、其残員を算へて見たが兩小隊の死にのこりがまだ六七十人あつたので。それを率ゐて此陣地の背後なる西南斜面の最も我に近き地點まで突進し來りし、敵梯隊の先頭を目がけて猛烈果敢に反對にこちらから逆に突撃を決行したのであつた。

嗚呼惜しむべし宇野大尉はこゝに全く其處置を誤まつた、其勇氣は實に稱揚するに餘りあるけれどもこれは暴虎憑河の勇である。何故に前に決心した如く此陣地を死守するの決心を翻がへしたのであらふ。損害は多大であつたには相違ないが、早朝から正午まで五時間餘の戦闘に於て其半數を失なつたばかりである、堅忍持久西南の方にも東方にも何とか工夫をして必死の力を盡して相當の掩體を作り、以てどこ／＼までも此地で敵を喰ひ止める手だて

をして、此敵の主力の突進に當つても聊も恐るゝことなく沈著してそれが近よるのを待ち、猛射を近距離からあびせかけたならば、如何に優勢なる敵兵であつても直ちにこれを蹂躪することは出來ぬ筈である。況や彈丸がある以上は少し沈著して工夫をすれば、機關銃とても全く使用の出來ぬ筈はないのであるから。此様な悲觀的な過早な失望の自暴自棄的な突撃などを行なはずして、今一層の勇氣を出して此陣地を防禦したならばよかつたらふと思ふのは、決して自分ばかりではあるまいと考へる。更に残念に思ふのはまだ此際は士官が二人も居たのであるから、何とかして機關銃の使用方位は工夫が出來さうなものであつたに、二人ともに此方面の智識を缺いて居たのは残念である。それであるから將校たるものはこれに付けても何事でも研究して置く必要がある、よしや機關銃の教育を受けて居らずとも、それを使用する筋道位は知つて居らぬと、此様な場合に實に口惜しい不覺を取らねばならぬこととなる。此兩士官の中に誰れか一人機關銃を使用し得る人があつたならば

まだ兵卒も六七十人居たのであるからその中には少しは器用なものもある筈、それを助手に使用して曲りなりにも射撃を繼續して、今一奮發して堅忍持久するの考も起つたのであらふに。此の危急存亡のわかれる際に於て其大切な機關銃の研究をした人がなかつたので、更に一段志氣を沮喪せしめて敵に向つて絶望の突進をするといふ様な、殆んどやけくそ半分の處置に出るに至らしめたのは、實に惜しみて尚ほ餘りあることであると評者は思ふ。

今や宇野大尉が第一先登に立つて勇ましく西南斜面をかけ降りつゝ突進した勢に、敵は聊か面くらつたといふ有様で少しくうろたへ出した。で其機に乗じて大呐喊をあげて敵の梯隊に突き入らんとしたが、此の地は丁度今まで守つて居た陣地の蔭になつて、塔子山南麓の敵砲兵からの射撃を受けぬかはりに、西北雷旗堡子から有効なる小銃彈の、殆んど篠衝く雨の様な烈しい猛射を受けるので、流石死もの狂いの此の宇野中隊の残兵も一氣に敵にまで突入することが出来ず。敵前僅々二、三十米突に幸か不幸か一小地隙があつたの

で一先づそれを占領して、其前面の騎兵梯隊に向つて迅速を極めたる急射撃を行ふたが。我突然の突進に一時氣を吞まれて見て居たる騎兵の主力は、又この不意の急射に更らに大に周章して芹菜泡の土壁内に退却して其損害を避けたので、こゝに決死の宇野大尉は僅かに西南に向つて一條の血路を開き得たのであつた。こゝに於て其前に横たはる一筋の小川を越へて、成し得たならば鈴得小隊の居る自家窩棚に退却し、此の小隊と合して其圍壁に據つて敵と一戦を交へんとして、宇野大尉は又々先登に立ち原少尉は其殿りとなつて、一隊約六七十の士卒を一團として南々西に向つて約二百米突急進したが。斯くなつて來ると今までの勇氣は頗ぶる沮喪して仕舞つて、精神的の團結もゆるんで來て退却する兵隊は我先きにと此の危地を脱せんとあせるので、隊伍を整へ正々堂々と退却することは中々以て出來難い。味方は既に各個各別に寸時も早く死地からかけぬげ様とする機運に向へるこの時に於て、今まで此隊の頑強なる抗拒の爲めに實は少しく手を焼いて攻めあぐんで居た敵兵は、

三方四方から面白半分には残兵に猛射を指向する而已か。乗馬したるものは士官も下士も兵卒も勇氣一時に百倍して、それ一人も逃すなとばかり猛進馳突其退路を遮断して、これを鐵蹄の下に蹂躪し様とかゝるので。忽ちにして此敵騎の大群集の進襲の爲めに、小川の堤防附近に於て殆んど十重二十重に取り圍まれて仕舞つたが。まだ容易に屈せざる剛毅至極の宇野大尉は、此所に白刃をふるつて敵を四角八面に斬りまくり、音に響ける大日本後備歩兵の最後の程の勇ましさを見せんとして、大聲疾呼其部下を激勵收結せんとしたけれども。敵の騎兵は猫も杓子も司令部の雜役卒までもが勢に乗じて我に向つて競ふて進襲して來るのであるから、宇野大尉の折角の努力も其効を奏せずして、此第六中隊の殘兵は殘念ながら敵の爲めに處々にかけ隔てられ。彼所に五人此所に十人と敵數百騎に包圍されて、銃劍と銃床とをふるつて獅子奮迅の大格闘をやるといふ、悲愴慘怛たる戦争の繪に見る様々大血戰のすさまじさは、實に筆にも口にも述べ盡されぬ有様で、此宇野中隊の勇戦には

敵の勇將ミシチエンゴも流石に頗ぶる敬服して歎美感稱したといふのに見ても、如何に此後備兵が頑瞑式に強かつたかは保證することが出來ると思ふ。宇野大尉は敵中に突立つて血刀を杖にして味方の有様如何にと見ると、残り少なき味方の兵は原少尉以下七八人となつて仕舞つて。惜しき勇士は何れも此の八貝勾北方高地の北麓で、齒がみをなして殘念無念と叫びつゝ敵の騎兵に蹂躪されながら、尙ほ且つこれと格闘して一人とても降參するものはなといふ壯烈を極めたる有様に、最早我武運もこれ迄と軍服ぬいで白刃せんとしたのであつたが。側に居たる原少尉は忽ちこれををし止めて遙に自家窩棚の方を指さし、まだ鈴得小隊が奮戦中であることはあの銃聲で知れるのである、かしこへは我が潰走した兵卒も多分に逃げ込んだに相違ない、今貴官が早まつたことをしてはそれこそ我隊の全滅である。今一層の勇を鼓して彼の村端まで斬りぬけて、其殘兵を一纏めにして一快戦を交へたる後、とても武運に盡きたる上はそこで一同切り死せんとの意見であつたので、それも道

理と宇野大尉は自刃を思ひ止まつて、大刀を眞つ向にふりかざしつゝ、當るを幸にきりなびけ、目ざすは遙かの自家窩棚とそれを望んで突進したが。三、四千騎の敵の騎兵は全く此の宇野大尉の近傍に集團して、一人も餘すな漏すまじと突く切る射つの大混戦、そこへ又八貝勾からと雷旗堡子の方向から、今まで射撃に任じて居た徒歩戦部隊が、乗馬してかけ付けて來たので其勢のすさまじさは殆んど譬へるものがない。宇野大尉は原少尉、川井一等卒外一人の四人とまでにうちなされて、自殺をせんにもそれをやるだけの暇もすきもない如く、藤麻竹葦ととりかこまれて攻めたてられるので。東西南北に斬りまくり突きまくり斬死せんと奮闘する間に、宇野中隊長は負傷したがそれにも屈せず働く中、又第二弾に重傷を受けて殆んど立ちすくんで動くことが出來ず、時を同じくして原少尉も重傷を受けて地に倒れた。此有様にウラーの大喊聲をあげて天地を震撼したる敵の騎兵は、もみにもんで此の殘兵に向つて突進し、其一騎兵將校は馬上より大刀を以て、負傷しながら尙且つ

立て敵を防ぎつゝある宇野大尉の頭上に不意に一打撃を加へたので、宇野大尉は全く人事不省に其場にたをれ。敵は我が此第六中隊の二小隊をあはれ無慘にも全く蹂躪し盡したのであつて、これが五月二十日の正午から午後一時までのことであつた。

此場合十九日宇野大尉が芹菜泡へ到着した時に、多少時間と勞力は多く要しても已むを得ぬから、此の芹菜泡西北高地上に若し速力を利用する騎兵に包圍された場合を顧慮して、豫め何れに向つても防戦の出來る様に彼の據點式に散兵壕を築造し、又其機關銃をも何れの方面にも移すことの出來る様に豫備工事をして、以て敵の近接を待つたならば二十日朝までにはそれが出來ぬこともあるまい。果してそれが出來て居たとすれば此の二十日には、思ふに此陣地を十分の八、九分までは守りおほせたかも知れぬと思ふ。が併し兵力が寡ないのであるから到底其様な大工事に堪へぬものとしたならば、現在の如く高地上に陣地を構へると同時に更に芹菜泡の村落に若干の防禦工事を補

加して、各交通路を外部に向つて遮断する方法を講じ。敵の大兵の襲來に當つては該陣地を機を失はず放棄して、自家窩棚の小哨をも速に此村落内に收容して、此村落を死守するの計畫を立てたなれば、努力少なくして確かに全滅の厄を免かれ得たのであつたが。此様な騎兵大集團と交戦した前例をもたぬ我軍歩兵に於ては、まだく對大騎兵戦闘の研究が足らなないので、そこに心がつかぬ爲めに此の慘境に陥つたのは、已むを得ぬとはいひながら實に惜しいことであつた。且つ又其上に惜しいのは宇野大尉が餘りに勇猛に過ぎて一度此の陣地の死守を宣言して置きながら、更に敵の大騎兵の主力に向つて突撃をしたことで、これは殆んど無意味なる行動といはねばならぬ。其勇氣は稱すべきであるが此場合猪突々進するよりも、沈著してまだ六、七十の銃數があるのであるから、それを揃へて有効なる近距離射撃を決行して、一人になるまで其射撃を持続して敵を射殺し盡すといふ、堅忍持久の覺悟を堅めて尻を落ちつけて居たならば、或は此陣地を辛ふじて守り得たかも知れ

ぬのである、然るに二重三重に大群衆の大騎兵の何十といふ梯隊に包圍されて、其既設の工事が用をなさぬのと機關銃の使用の方法がわからぬのとで、失望の餘りこゝに防禦を斷念して突進に移つたのは、これは確かに此の勇敢無比なる宇野新十郎大尉の大失策であつたと評者は信ずる。但し其一人も降伏せざる同大尉部下の勇戦は評者は非常にこれを稱賛し尊敬するに躊躇せぬ、天晴れである健氣であるそれでこそ大日本の軍人である。

我が萬古以來東洋に國を建てたる大日本國は、物質的のここそ歐米諸國の長所を取るに逡巡せぬが、其精神に至つては斷じて彼等毛唐人どもの眞似はせぬ。其紅毛の唐人の中にも毛色のかはつた獨逸などは敏くも我が日本の大和魂を研究して、遂にこれを利用して世界を敵として勝ち續けて居る。其彼れ獨逸軍人等の此頃の言分は何とあるかといふと

「獨逸國は全勝を目的として努力する、若し勝たざれば全滅ある而已其他を願はず」

此の一語こそ實に我が日本軍人の大切なる守り本尊である永久不變の立場である。今は横著なカイゼル陛下が此の語を專賣特許にして居るが、それは特許權の大侵害である日本軍人の眞似である。即ちとりも直さず此の宇野大尉部下の全滅は、此の一語の獨逸の發明したものでないことを明らかに證據だてるものである。何萬とか何十萬とかいふ様な計算も出來ぬ程の降參人を上手にこしらへる、歐洲戰の敵味方のお豪らい聯合國や土耳其や埃國の軍人達、少しこの宇野大尉の中隊の後備兵の爪の垢でも煎じて飲んで見てはどうである。さすれば今少しお強くなれるかも知れぬと思ふのは、惡口ではない。く評者の老婆親切である。

大正五年六月二十八日印刷
大正五年六月三十日發行

〔戰史評論與附〕

著者

無名戰士

東京市麴町區平河町四丁目十一番地

發行者

宮本林治

東京市赤坂區田町五丁目十一番地

印刷者

山田三次郎



發行所

東京市麴町區
平川町四丁目

宮本武林堂

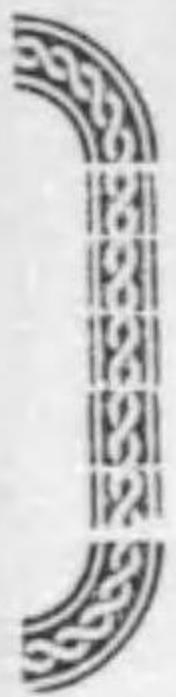
電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番

此の一語こそ實に我が日本軍人の大切なる守り本尊である永久不變の立場である。今は横著なカイゼル陛下が此の語を專賣特許にして居るが、それは特許權の大侵害である日本軍人の眞似である。即ちとりも直さず此の宇野大尉部下の全滅は、此の一語の獨逸の發明したものでないことを明らかに證據だてるものである。何萬とか何十萬とかいふ様な計算も出來ぬ程の降參人を上手にこしらへる、歐洲戰の敵味方のお豪らい聯合國や土耳其や埃國の軍人達、少しこの宇野大尉の中隊の後備兵の爪の垢でも煎じて飲んで見てはどうである。さすれば今少しお強くなれるかも知れぬと思ふのは、悪口ではない。評者の老婆親切である。

大正五年六月二十八日印刷
大正五年六月三十日發行

〔戰史評論與附〕

著者 無名戰士



戰史評論
七月豫告

露國騎兵大集團の法庫門附近來襲下

發行所

東京市麴町區
平川町四丁目

宮本武林堂

電話番町五五一八番
振替東京一〇九一二番



戰史評論

大正五年七月（露軍騎兵大集團法庫門附近來襲 下）

宮本武林堂發行

大正
5. 7. 31
內交